特217
888

NOUVEAUX COURS DES RELIGIONS JAPONAISES

大日經綱要

金山穆韶

東方書院

始

特217
888

大日經

金山穆韶

目次

序說
一、本經の正意……一
二、本經の法體……三
三、本經の教主及密教の起源……六
四、本經の組織……一〇
本文の梗概
一、經名の解……一四
二、入眞言門住心品の名義……一九
三、序分……一九
四、本經の說處……二〇
五、大日如來の眷屬……二一
六、內眷屬十九執金剛……二四
七、大眷屬四大菩薩……二四
八、所說の法門……二六
別序

一、神變加持の示現……三一
二、瑞相の三身と隨他の三身……三二
三、別序經文の略述……三五
正宗分
一、三句の發問……三六
二、三句の答說……四一
三、九句の法門……五一
四、四句の略答……五三
五、心續生の廣答……五六
六、三十種の外道……五七
七、八心……五九
八、六十心……六一
九、三劫……六四
十、十地……七八
十一、六無畏……八四
十二、十緣生句……八六

大日經綱要

金山穆韶

序說

一、本經の正意

弘法大師の上足の弟子實惠僧都が、大師の口說を記述せる大日經王疏傳に、眞言密敎は直住月宮の法門なる旨を記す。これは譬によせて眞言密敎の敎意を明かせるものである。卽ち月を見るに、地上よりするものは、雲霧の月光を遮へることあれば、その晴るゝを待たずば、月光を賞し得ざれど、若し神通の寶車に乘じ、直に天上に至りなば、地上にて月を遮へる障碍物たりし雲霧も、却て月の光彩として見らるゝやうに、我等が如來の光明に觸れ、永遠眞實の生活に入る道を明す佛敎にも、二つの異なれる道がある。一は我等の無明煩惱を除き、生死界より涅槃界に至る敎であつて、一は不思議神通乘たる眞言の法門を修し、如來の加持力に依り、直に如來の境界に住する道である。卽ち一は有限より無限に至らんとする行き方であつて、一は直に無限に住し、永遠の光りに依て、一切を見んとする道である。眞言密敎は直住月宮の敎なり、果分の敎なり、卽身成佛の敎なり、從果向因の法門なり、入道の最初より佛地の

三昧道に住する教なり等といふは、密教は凡身が直ちに如來眞實の境界に至り得る、秘旨を明すものなることを語るものである、即ち如來の顯示せる三密の法門を修し、如來の加持力に依て如來の境界に入り、如來のうちに己れを空うし、妄分別を除き、凡身に即して如來常住の生を體得する道を明すものである。

大日經には從レ因至レ果の法門と從レ果向レ因の法門とが、相雜へて說かれてある。從因至果とは、因位の凡夫が煩惱を斷じて、佛果に入る道にして、本經に明す、三句、三劫、六無畏、十地、十喩、五種の三昧道等の法門は、凡夫が迷妄を破つて佛果に至る道にして、所謂從因至果の法門とも見らるゝ、また大日如來が自覺の果體より、無量の功德を示現し、一切衆生を救濟しつゝある、曼荼羅の顯現たる從果向因の法門を說く、かゝる從因至果と從果向因、即ち有限より無限に向ふ道と、直に無限に住し、無限の功德を永遠に實現せんとする、二つの法門とが相雜へて說かれてある。そして本經の正意は從因至果にあるか、また從果向因にあるかは、古來本宗の教徒に依て研覈せられたる重要なる問題なるが、本經には從因至果、從果向因の二つの法門雜へ明すも、本經の正意は從果向因にありとなすは、本宗教徒の一致せるところである。

總じて密教は大日經より云ふも、また金剛頂經より云ふも、何れも如來果地の境界を明すものである。即ち兩部の大經は何れも大日如來の體より、大智慧、大慈悲の無邊の德相を開顯する、曼荼羅の生起を說くを正旨とするものである。これ密教は從果向因を正意とする所以である。

然るに本經は前叙の如く、大日如來の神變加持の境界を明すものなれば、本經の正意は從果向因にありとすと云ふも、而も衆生が發心修行して、如來の境に至る道程よりいへば、密教も從因至果の道を明すものなりといはねばならぬ。

併しながら密教に依て修行するものは、入道の最初より神通乘たる如來三密の法門を修し、如來の加持力に依り、如來の境界に入り、如來のうちに己れを空うし、如來常住の生を體得するものである。かゝる境地に至れるものゝ行爲は、已にこれ凡夫の行にあらずして、如來に代り、衆生濟度の行をなしつゝあるものにして、涓滴の善根も永遠不盡の價値あるものである。密教に即事而眞、即身成佛とはかゝる境地を云ふのである。即ち己れを捨て、如來に歸命し、如來に依て生きたるものゝ一切の行は、これ如來の行である、如來と共に永遠眞實の生活をなしつゝあるものである。我等は心を深く如來の眞心に冥合せしむるに至れば、發心、修行の從因至果の行相も、その體より云へば、如來の功德を實現しつつあるものにして、從因至果の道程がそのまゝ從果向因である。

要するに密教は、如來の功德の開顯たる曼荼羅の生起を明すものなれば、經の正意は從果向因にあり、しかして此教に依て修行するものゝ道程は、一應いへば從因至果なるも、深く教旨よりいへば、修行の道程も、またこれ從果向因なりといひ得らる。

二、本經の法體

先きに本經に凡夫が發心修行して、如來果地に至る從因至果の法門と、如來の果體より無量の功德を顯示する從果向因の法門あるも、本經の正意は從果向因にあることを述べ、また因位の凡夫も發心の最初より、心を深く佛心のうちに住しなば、從因至果の道程そのまゝ從果向因にして、我等は如來眞實の功德を顯現しつゝあるものなることを略

叙した。しかして更に從因至果、從果向因の法門は何を以て體とするか、即ち本經に說く法門の本體は何んであるかを明かさうと思ふ。本經及び本經の疏に、本經に明す法門の體について種多の說がある。その中、最も根本的のものを擧ぐれば、衆生の一心を本經の法體と見るべきである。本經の初めには「實の如く自心を知る」と說かれ、疏には「衆生の自心品は即ち是れ一切智々なり、實の如く了知するを名けて一切智者と爲す」と釋す。本經は經文に明す如く、實の如く自心佛を體得するを、一經の大宗とするものゝ隨て衆生の一心が本經に明す法門の本體である。一心が本經の體なりと云ふも、本經は智的方面より、自心自覺の義を明すよりも、寧ろ如來と衆生との感想道交の宗教的實踐によつて、自心を如實に體得する秘義を主として說くものである。即ち感應加持の事實に即して、而もこの加持の事實を超越する、遍一切處の法身大日如來に歸し、つひに法身大日如來は、これ自心なる自覺を得するに至る道を明すものである。本經の疏にこの入信の道程を示して、加持身を知れば本地身を知る、本地心を知れば自心を知るといへり。この自心の自覺が一經の大宗にして、隨て一心が本經に明す法門の體である。

經に一心の體相を明かし、一心は無相なり、大空なり等と說き給ふ。而もこれ一心は虛無なり、空寂なりと云ふ意にはあらず、一心の體は我等の分別思惟を絕せることを示すものである。隨て無分別智の體驗の境地にては、一心は空にあらず、無にあらず、寂にして照、法界に周遍し、靈活自在の妙用を現するのである。即ち主客分別の妄念を絕するところに主客一如の一心の自體が顯はるゝのである。この一心をば淨菩提心[三]とも、また理智不二の一心とも云ふ。例へば明朗なる珠體には、珠自らを照す光りあるが如く、妄分別を絕せる淨菩提心には、自ら遍照法界の靈用がある。この一心法爾の靈體をば理といひ、遍照法界の靈用を智といふ。一心の自體は珠と光との如く、理智不二、寂照一如の體である。本經の一心は此の如く理智不二の一心なるも、而も暫らく金剛頂經に對せば、大日經の一心は理を本とするものにして、金剛頂經の一心は智を表とするものともいひ得らる。また一心は平等差別不二の體なることを明す。即ち一心は無相にして、因果差別を離れたるも、而も一心は因果差別の外に孤然として獨存するにあらず、從因至果、從果向因、向上向下、因果の當體これ一心の轉起である。即ち從因至果、從果向因の因果の法門は一心を體とせるものにして、この因果の法門に依て非因非果の絕對の一心に契合する旨を說くものである。また一心は動靜不二の體なることを說き、一心は寂靜なり、不動なり、而も枯木死灰なるにあらず、靈動息まざる勇健の菩提心なり、無所住にして、進趣息まざる體なることを明す。

要するに一心は無相なり、不動なり、因果を離れたる非因非果の體なりと云ふは、これ一心は分別思惟を絕せる體なることを明す。而して無分別智に依て、この一心の自體に契合せんか、こゝに妄念の因より生ずる、生死の生を離れ、如來常住の生を體得し、永遠に無限の功德を顯現する、如來眞實の生活に入るべきことを說くものである。即ち凡夫の身を以て如來に歸命し、凡聖不二の妙境に至れば、もはや自もなく他もなき、絕對法爾の法身の世界が開けるのである。かくして深き內面より湧き出で、法界を一念に攝したる絕對力の充塞したる心境の體現こそ、やがて如實知自心の域に入れるものと云ふべきである。この境に至れば、念々これ法身の本源的起動である。無作[四]の作である、一切の施爲皆これ如來の妙行にして、所謂從果向因の相である。加持身を知り。本地身を知り、自心を知るこれ入信の道程なりと云ふも、我等は無執無念にして、如來を觀念するとき、自ら自他の分別を離れ、我即法身、當處即法界、一心の眞際に住し得らるゝのである。

三、本經の教主及密教の起源

傳統の說に依れば、大日經は、法身大日如來の說なりといふ。しかれば密教は釋迦如來の說にあらざるか、今この義を約述せんに、凡そ大乘佛教の經說に依れば、如來とは釋迦如來一人でなく、無量の如來在ます。この無量の如來を或は法、報、應の三身に分ち、または自性、受用、變化、等流の四身等として說くことがある。固より如來の本體は一なるべきも、無量の如來の在まし給ふは、如來を瞻る衆生の見地の異なるに依るのである。例へば虛空は限りなかるべきも、若し大小異なれる窓より之を見んには、虛空にも自ら幾多の限られたる相を生ぜん。しかして屋外に出づるに及んで、限量を離れて、虛空の眞相を見得るが如く、絕對の如來も、我等の分別識に依るが故に、或は三十二相具足の應身を見、或は八萬四千の相好圓具の報身を見る。しかも分別の妄念を絕したるものゝみ、如來の眞身たる法身大日如來を見るのである。

報身とは、因位の無量の修行に報ひて、無量の功德を成就せる佛身にして、應身とは、報身より六道の衆生等の爲めに、種々に應現する佛身である。法身とは報應二身の本身にして、遍一切處、不生不滅の佛身である。しかるに法身は絕對無限にして、我等の分別思惟を絕するが故に、佛經のうちには多く否定的說示に依り、法身は無相なり、不可得なり、衆生攝取の靈用もなく、說法もなき、理體なり、法なりと云ふ。しかるに密教にては、法身如來には法身自らの體を證知する心識あり、自らの本誓(五)三昧を表現する言說あり、衆生攝取の大威神力あり、無量の微妙なる色相を具し、無數の菩薩衆と共に、三世常恒に說法しつゝあることを明するものである。此くの如く諸佛の眞身たる法身

大日如來の實在を明すところに、報應の二身も實在性を得、法報應三身常住の實義が顯はるゝのである。もし、法身の實在性が顯れずば、報應二身は何んら眞實性なき佛身にして、幻の如く、化の如く、つひに寂滅の涅槃に歸し給ふことゝなるのである。以上は如來の教理的解說なるが、これを歷史的如來についていへば、地上に顯れ給ひし如來は、釋迦牟尼如來一尊である。隨て報身如來の說法と云ふも、これ應身の釋迦如來が、報身の三昧に住して說けるを、報身の說法と云ふが如く、法身大日如來の說法と云ふも、これまた應身の釋迦如來が、法身の三昧に住して、說法せるを、法身大日如來の說法ともいひ得らる。されば大日經は法身大日如來の說法なりと云ふも、やはり釋迦如來の說であつて、釋迦如來が法身の三昧に住して說けるゆゑ、大日經は法身大日如來の說と云ふ義が立するのである。古來法身大日如來の說法をかゝる意義に解するものがあるのである。

しかるに弘法大師の教義を相承せる、眞言密教にては、密教は固より釋迦如來の自證本覺の體を說くもの、釋迦如來の眞精神を傳ふるものなりと云ふも、而し釋迦如來が自證本覺の體に住して說けるものは、これ密教なりといはず、卽ち釋迦如來は此土の教主にして、釋迦如來の本地身たる大日如來は、大日の淨土たる自性法界宮卽ち色(六)究竟天に於て、說法せるものは、大日經金剛頂經なりと爲すものである。此の如く密教にて釋迦如來と大日如來とは、二佛別體なるが如き說をなし、密教は法身大日如來の說なることを高唱する所以は、上述の如く密教は眞住月宮の教なり、本覺爲宗なり、果分の教なり、卽ち如來自證究竟の果體に直住し、その果體を直證直顯するを大宗となすにある。

法報應の三身は體用の不同にして、不離相卽の身である。しかして一般佛教にては、應身の釋迦如來を本とし、報

法二身を應身に攝し、釋迦卽報身なり、釋迦卽法身なりと說くものである。隨て報身の說法、法身の說法と云ふも、これ釋迦如來の說法に外ならぬことゝなる。

卽ち釋迦如來を本とし、報法二身を釋迦如來に攝して見れば、法身大日如來の說法と云ふも、釋迦如來の說き給へるものとなる。しかるに密敎は釋迦如來の本覺の體たる法身を本とし、法身を本質とし、報應を影像とし、密敎は法身大日如來の說なる義を立す。隨て密敎は法身の說にして、報應二身の說にあらずと云ふことゝなる。

法身大日如來の說き給へる密敎を、如何にして人間に傳へたりや、これにつき傳統の說に依れば、大日如來色究竟天に於て說き給へる密敎を、金剛薩埵之を結誦し、以て南天竺の鐵塔のうちに藏し、時を待ち、人を待ちしに、偶々釋迦如來滅後八百年の頃に龍樹菩薩出現し、この鐵塔を開き、金剛薩埵より密敎を傳へ以て世間に流布せしものなりと云ふ。しかれば此土に於ける密敎の起源は、龍樹菩薩の南天の鐵塔開見にありといふべきである。凡そ密敎に說く法身說法の義は、釋迦如來滅後、龍樹菩薩に依て唱導せられたものである。弘法大師の顯密二敎論に引用せられたるが如く、龍樹の智度論に、法身說法の義を明かす。しかして龍樹菩薩が南天の鐵塔を開見して傳へたりと云ふ、密敎の根本經典たる大日經及び金剛頂經は法身說法の秘義を開示するものである。卽ち法身の說き給ひしものは兩部の大經である。敎理史的に見れば、南天の鐵塔とは法身說法の敎義である。所謂鐵塔とは法身如來である。法身說法の義を唱導せる、龍樹菩薩に依て、南天の鐵塔を開き、法身說法の兩部の大經を傳へたりといふは　眞に意味深長といはねばならぬ。世間往々龍樹菩薩は密敎の祖師にあらず、密敎の經典は龍樹より以後に成立せしものならんといふものあるを見るが、或は密敎の聖典にて龍樹以後に成立せしものもあらん。而も密敎の本義たる法身說法の義を、龍樹菩

薩に依つて唱導せられたるより見て、龍樹菩薩を密敎の祖師とするに、何んら不合理がないのである。

前述の如く密敎の敎主及び起源について、種多の說がある。卽ち密敎は釋迦如來の說なりといひ、或は大日如來色究竟天に於て、密敎を說きけるが、普賢菩薩（金剛薩埵）大日如來の敎勅をうけて、人間界に下りしものは釋迦如來なり、隨て釋迦如來多く顯敎を說き給ふも、その內秘たる密敎を往々に開示せりといひ、或は龍樹菩薩、南天の鐵塔を開き、金剛薩埵より密敎を傳へたり等といふ。これらの說は密敎の敎主及び起源について、各々ある一面を明かすものである。卽ち大日如來は色究竟に於て說けるものは密敎にして、密敎は此の土に出現せる、釋迦如來の說にあらずと云ふ義に依て、顯密二敎その敎旨に於て、立場の異なりあるを知ると共に、不生不滅の法身が、三世常恒にその本誓三昧を演說しつゝあるは、密敎の敎體なることを知るべく、また金剛薩埵が大日如來の敎勅をうけて、此の土に下り、釋迦如來として多く顯敎を說くも、往々その內秘を開演せるとの說に依て、釋迦如來の一代佛敎も、その敎の根底に密敎を含むものなることを知るべく、また釋迦卽大日にして、密敎は釋迦如來の說なり、或は南天の鐵塔より傳へたり等の說に依て、密敎も他の大乘經典と條件と同うして、成立せしを知るべきである。

要するに一代佛敎の中心觀念は法身である。而して密敎はこの法身を積極的に解するを以て、本領となすものである。法身は釋迦如來に依て開顯せられたるより見て、釋迦如來は密敎の敎主なりといひ得らるべく、また法身の積極的意義は、龍樹菩薩に依て唱導せられたるより見て、龍樹は密敎の祖師なりと稱せらるべく、また龍樹菩薩に依て傳へられたりと云ふ、兩部の大經に明す法身大日如來は、不生不滅三世常住の體にして、釋迦如來を超越し、釋尊以上の高き地位に住するより見て、大日如來は釋迦如來の本地身にして、法界宮に住し、三世常恒に三密平等の法門を開

說する、密教の根本教主なる眞意を了知すべきである。

四、本經の組織

本經は一部七卷あり、章を分つこと三十六、常にこれを七軸三十六品と云ふ。而して本經の經題は、大毗盧遮那成佛神變加持經と稱し、本經は大日如來の自覺自證の覺體より、神變加持の化他大慈悲の業用を現する深義を明すものとも見らるゝ。而もこの大日如來の自證化他は、これ衆生の一心即ち淨菩提心の體用なれば、前述の如く本經は衆生の一心を體とし、この一心を如實に體得する道を明すものと解すべきである。七軸三十六品共に淨菩提心を體とし、この淨菩提心に契證する道を明すものなるも、三十六品大に分てば二門となる。即ち第一の住心品は淨菩提心體と、及び低き信念の向上して、つひに淨菩提心を如實に體得するに至る、信念の向上歴程の相を明すものである。即ち教理の方面より密教の正旨の存するところを明すものなれば、第一住心品は密教の教相を開說するものなりとも云ふ。第二具緣品以下の三十五品は正しく如來三密の法門を修する密教の實踐の法則を明すものである。この實踐の法則中には、種多の事作法あるより、具緣品以下の三十五品は密教の事相を開說するものなりとも云ふ。即ち第一の住心品は無相の一心に契證する教相を明すもの、第二具緣品以下の三十五品は有相の事相を明すものである。または云ふべし、住心品は所歸所入の究竟の一心の體を明すものにして、第二品以下は一心の自體に契證する能入進趣の方便行を說くものなりと。而も如上の所說の如きはこれ大體の見方にして、細かに觀れば具緣品以下に事相と共に教相を明かし、また一々の事相皆これ如來無盡の功德の表象なり、淨菩提心の象徵なれば、事相に即して、無相の一心を觀じ、如來の內證に契合すべき秘旨を示す。即ち俗諦の有相さながら、無相眞諦なる深義を開示せらる。また住心品は無相の一心を明すも、この一心は一切萬法に連らなるの一心、即ち無相即有相の一心である。されば住心品は無相の一心を明す教相、第二品以下は一心に契證する事相の行規を說くと云ふは一應の說にして、三十六品に亘り無相即有相、有相即無相の深旨を開演するものと知るべきである。今七軸三十六品の品名を列ねんに、

卷第一　入眞言門住心品第一
同　入曼荼羅具緣眞言品第二
卷第二　息障品第三
同　普通眞言藏品第四
卷第三　世間成就品第五
同　悉地出現品第六
同　成就悉地品第七
同　轉字輪曼荼羅行品第八
卷第四　密印品第九
卷第五　字輪品第十
同　秘密曼荼羅品第十一
同　入秘密曼荼羅法品第十二

同　入秘密曼荼羅位品第十三
同　秘密八印品第十四
同　持明禁戒品第十五
同　阿闍梨眞實智品第十六
同　布字品第十七
卷第六
同　受方便學處品第十八
同　說百字生品第十九
同　百字果相應品第二十
同　百字位成品第二十一
同　百字成就持誦品第二十二
同　百字眞言法品第二十三
同　說菩提性品第二十四
同　三三昧耶品第二十五
同　說如來品第二十六
同　世出世護摩法品第二十七
同　說本尊三昧品第二十八

同　說無相三昧品第二十九
同　世出世持誦品第三十
同　囑累品第三十一
卷七
供養念誦三昧耶法門眞言行學處品第一
同　增益守護淸淨行品第二
同　供養儀式品第三
同　持誦法則品第四
同　眞言事業品第五

唐の玄宗帝開元四年(西曆七一六)善無畏三藏、本經の梵本を持し印度より支那に來り、開元十二三年の頃、本經を翻譯し、一行禪師の爲めに本經を講ぜしが、三藏の講述を一行禪師筆錄せられたる本經の注釋書あり。この注釋書日本へ請來せしものに、十卷、十四卷、二十卷の不同あり。弘法大師の請來せしは二十卷の書にして(經の前六卷を釋す)常にこれを大日經疏と云ふ。この外に經の第七卷を釋せし疏二卷あり、今此等の疏に依て大日經の要旨を述べようとするのであるが、こゝに一言致しおきたきは、經文は從容多含にして、一句の文も淺深重々の義を有す。隨て本經の文義を釋するにあたり、往々善無畏三藏の釋と、弘法大師の解と一應相違することがある。卽ち弘法大師は善無畏三藏より經意を深義に解せらるゝことがある。が、かゝる場合は、大師の說を本とし、これに淺略の義をもかね、淺略、深秘は一法門の兩面なりとの見地に立て、經意を釋することにする。

(一)三密の法門、　三密とは具さには身口意の三秘密とも云ふ。如來の身口意は統一ある平等一味の體にして一切處に遍じ、凡夫の思議を絶するが故に、三秘密と云ふ。如來大慈悲を以て、衆生をして如來の三密の體に契はしめんが爲めに、三密の法門を說く、衆生この三密の法門を信じ、口に如來の眞言を誦じ、手に如來の印契を結び、心に如來を觀念すれば、不統一の凡夫の三業も自ら相應一味の體となり、如來の不思議力に加護せられ、如來平等の三密に相應し、如來の功德を凡身に體得せらるゝのである。

(二)曼荼羅、梵音の maṇḍala にして、輪圓具足とも譯す。靈活自在の如來の妙相を云ふ。またこの妙相を圖繪せるものを云ふ。

(三)淨菩提心、　菩提とは梵音の bodhi にして覺とも翻す。淨菩提心とは、先天本有の靈覺の心性である。

(四)無作の作、　分別の妄念を離れ、如來の心に相應せる行爲である。

(五)三昧、　梵音の samādhi にして、心を一境に住せしめ、心の統一したる狀態なり。

(六)色究竟天、　三界中の色界の最頂の天である。今大日如來の淨土を色究竟天と云ふは、これ色界最頂の天に寄せて、大日如來の淨土を示せしなり。その實、大日如來の淨土は色界頂を超越する、遍一切處の體なれば、常に自性法界宮、または密嚴淨土等と稱す。

本文の梗概

一、經名の解

本經を常に大日經と稱するも、具さなる經名は、大毗盧遮那成佛神變加持經である。この經名に本經一部に明す法門の要諦を含むが故に、今經名を略述せん、大毗盧遮那成佛神變加持經とは、大日如來の自證成佛の體より、大威神力を十方世界に示現し、一切衆生を救攝し給ふ秘趣を說く經なりとの意である。善無畏三藏の本經の疏に、毗盧遮那 Vairocana を日と譯し、更にその義を釋し、日に除レ暗遍明、能成二衆務一、光無二生滅一の三義あることを明す。その除暗遍明の義とは、世間の日輪の一切の暗を照すが如く、大日如來の大光明は、普ねく法界の衆生を照らし、一切の迷妄を破り、衆生をして先天本有の靈性を覺悟せしむるの義にして、能成衆務とは、日輪の光明に依て、一切の草木等生育をなし、人よく一切の事業を成ずる如く、大日如來の光明も遍ねく法界を照らし、衆生の善根を開發し、世間出世間の殊勝の事業、皆大日如來の光明に依て成就するを云ふ。光無生滅とは、世間の日輪は、重雲に覆はるゝも壞滅するにあらず、また猛風雲を吹いて日光顯照するも、始めて生ずるにあらざるが如く、大日如來の覺體も衆生の迷雲如何に覆障すとも、減ずることもなく、また大覺圓滿の佛果にありても、增することもなく、大日の覺體は不生不滅、三世常住なることを明す。されば大日如來の大光明を、しばらく世間の日に比し以て日と云ふも、而も大日如來の絶對の大光明は、世間の日に比較すべきものにあらざるが故に、大の字を加へて、大日と云ふ。以上の除暗遍明、能成衆務、光無生滅の三義は、これ法身大日如來に具する大定、大慈、大智の三德なり、また法、報、應の三身である。

即ち大日如來の自覺の體性は、一切の妄分別を離れ、時空を絶し、理智一體、智悲不二の體である。しかしてこの大定の體を動せず、その大慈悲と大智は普ねく一切處に遍ず、かゝる如來の自覺内證の心境は、唯佛と佛とのみ知り給ふ。即ち分別智を離れざる生死の衆生は、如來の自覺内證の心境を知ることができない。例へば日輪天に中するも盲者は見えざるが如く、雷霆地に震ふも、聾者は聞くこと得ざるが如く、法身大日如來の不思議の身口意、無限の大光明は一切處に遍ずるも、妄思惟にて意識の全面を掩はれたる我等は、如來の眞身を親しく仰ぐことができ得ないのである。こゝに於て大日如來、往昔の大悲願力に依るが故に、此の念をなす。若し我れたゞ是の如く自證成佛の境にのみ住しては、一切衆生親しく如來の說法を聽き、如來の妙相を見、その心相を觀じて佛境界に入ること能はずと、こゝに大日如來一切衆生に應同する自在神力加持三昧に住し、一切衆生の爲めに種々の身相を現じ、種々の法門を說き、如來の心地に住する妙法門を示す。即ち凡夫の分別智にてなほ意識し得らるゝ、受用[1]、變化、等流の無盡の身口意の三密門を奮迅示現し給ふのである。所謂神變加持の業用を現じて、一切衆生を濟度し給ふのである。而も大日如來の自證成佛の本質先づあつて、次に神變加持の作用が現ずるにあらず、成佛の本質と神變加持の作用とは、あたかも日月の體と光明の用と同時俱存なるが如く、受用、變化、等流の影像も自性法身の大日の本質と共に無始本有の實在である。即ち大日如來が自證の三昧に住し、三世常恒に三密平等の法門を說き給ふと共に、受用、變化、等流の諸尊も三世常恒に化他大慈悲の妙用を、法界に示現しつゝあるのである。隨て受用、變化、等流の神變加持の化用は、分別智を以て意識し得らるゝ靈體なりと云ふも、而もその自體は分別の境を超越し、無相法身と同體である。所謂機あれば興起し、緣つきぬれば滅するも、その起滅の當體、起滅の相を超絶せる不生不滅の法身である。されば本經の疏に

この秘旨を釋して

此の應化は毗盧遮那の身或は語或は意より生ずるにあらず、一切の時處に於て起滅邊際俱に不可得なり。(中略)緣謝すれば則ち滅し、機興すれば則ち生ず。即レ事而眞(シテニモナリ)終盡あることなし云云。

上述の如く、本經は法身大日如來の自證成佛の體より、神變加持の作用を示現し、一切衆生をして等しく大日如來の大覺位に、引攝せんとする秘義を說くものである。是の如く此の經は一切如來の秘藏を開顯せるものにして、衆經の中に於て威德特尊なれば、此の經の梵名に Sūtraindrarāja 即ち經王と云ふ。

二、入眞言門住心品の名義

本經に三十六品あるうち、第一品を入眞言門住心品と云ふ。上述の如く第一住心品は、眞言密教の教義、即ち教相を說くものにして、第二品以下は實際に密教を修する方規、所謂事相を明すものである。第一住心品は教義の方面より、密教の要諦を開說するものにして、隨て本經の基礎をなすものであるが、その教旨は漸次解說することゝして、先づ其の品名を解せんに、入眞言門住心品を訓讀すれば、「眞言門に入つて心に住す」と讀むべきである。眞言門に入るとは、正しく如來の三密の法門を修することである。即ち大日如來の神變加持力より示現し給へる、阿彌陀、釋迦、觀音、文殊、普賢等の曼荼羅の諸尊の中の、一尊の三密門を修するを云ふ。口に自身の歸命する本尊の名號を唱へ、手に合掌等の印を結び、心本尊の心地に住せしむるに至れば、こゝに我等の身心が淸淨となり、水澄めば月を宿す如く、如來の身心と感應道交の境に入るのである。所謂如來と入我々入の秘觀を成ずるのである。かくして久修練行せば、

如來無量の功德を現身に體得せらるゝのである。卽ち凡身を改めず、如來の境に入らるゝのである。本經の疏に人の遠く行くに羊に乘るものあり、また馬に乘るものあり、而も此等は多くの時間を要せずば、目的の地に至り得ざるも、若し神通の寶車に乘るものは、某處に至らんとの發意をなすと同時に、直ちに目的の地に至るを得、その羊に乘り、馬に乘るとは、これ四諦、六度等の一般佛教に明す修行を云ふのであつて、神通の寶車に乘るとは、眞言門に入り三密の行を修し、現身に如來の位に入るを云ふ。而して入眞言門の三密行は第二品以下に明すものなるが、今第一住心品は眞言門に入つて三密の行を修する人の、低き信念、向上進趣し、つひに自心佛を體得し、如實に自心に安住する道を說くものである。

眞言門に入つて三密の法門を修する人は、速かに自心佛を開見すべきはずなるも、なほ分別の念を離れざるが故に、心外に佛を見、或は唯心の佛を見、つひに主客を絕する絕對の法身に契合し、如實に自心佛を體得するに至るのである。此の如く低き信念の向上して、如實に自心を知るに至る住心の轉昇に淺深重々あるが故に、弘法大師はこの住心を開いて十住心の法門を明かす。されば今第一住心品には、低き信心の向上して、つひに如實に自心の眞性を見るに至る、信念向上の道と、自心の本性に住し、自心所具の無限の德性を永遠に顯現しゆく道とを說くものである。この自心の本性の開顯を明すに、或は發心、修行、證菩提、入涅槃、方便爲究竟の五轉とし、または菩提心爲因、大慈爲根、方便爲究竟の三句として說かる。かく一心の開顯を三句とし、また五轉として說くとき、この三句、五轉は地前の法門なりや、地上の法門なりやの說あるとき、大日經に說かれたる三句五轉は、これ地前の法門にあらずして、地上の法門なりと見るを正意となす。地前とはなほ分別の念を離れざるをいひ、地上とは主客分別の細念を絕し、主客

一如、理智不二の一心の眞性を體得せる位を云ふ。かく三句、五轉の法門を明かし、地上一心の開顯を說くより見るも、本經は一切衆生先天本有の菩提の德性を永遠に實現する道を開演し、凡身に卽して如來眞實の生活に入る秘義を明すものなることを知るべきである。

三、序　分

一經の文を序分、正宗分、流通分の三段に分つは、晉の道安以來、諸家、經を釋する通範である。序分は一經の起る因緣を明すものにして、正宗分は正しく本經の所說、流通分は本經を未來に流通し、衆生をして信受奉行せしむる功德を明かせしものである。その序文にまた通序と別序とある。通序とは所謂五成就にして、是の如く我れ聞く、(信成就)一時(時成就)如來(敎主成就)某處に於て(住處成就)某々の弟子等の爲め(眷屬成就)敎を說き給へると云ふ文にして、五成就の文は一經說會の儀式を明かし、一經成立の次第を說くものである。この五成就の文は何れの經にも皆その初に置かれ、各々の經の成立の次第を示す。是の如き五成就の文は諸經に通ずるが故に通序といひ、別序とは別して、その經の正宗分の起る由來を明すものである。

大日經の通序の如是我聞の信成就の文は、これ金剛薩埵親しく大日如來より此の經を聞けることを表はし、一時なる時成就の文は、此の經の說時なるが、本經を說かれたる敎主は已に三世常住の大日如來なるが故に、隨て本經の說時もまた世間の時日を超越せる、三世常住の時に於て、說かれたりといはねばならぬ。されば本經に本經の說時を明かし、「三時を越えたる如來の日、加持の故に」といへり。本經の疏に此の意を釋し、本經は過去、現在、未來の三世

を越えたる常住圓明の如來の日、而も如來の神力に依て、長き無量劫の時間を一念に短促せしめ、また一念の時間をも無量劫の長時間の如く思はしめ、衆生の機情に順し、常住の時を延促自在ならしむる加持日に於て、本經を說かれたりといへり。

次に本經の敎主成就を經には薄伽梵といへり。薄伽梵 Bhagavān とは梵音なり、世尊とも翻し、如來の尊稱にして、本經の敎主たる大日如來である。本經の敎主は序說に述べしが如く、諸佛諸神、卽ちあらゆる靈なるものゝ本源本體たる法身大日如來である。

四、本經の說處

本經の說處たる住處成就の義を述べんに、當經の敎主は印度出現の釋迦如來なりとせば、本經は此の土の某處に於て說かれたるものなりといひ得らるべきも、本經の敎主は釋迦如來の本地身たる法身なれば、本經の說處も、また此の土を超越せる如來眞實の淨土ならざるべからず。されば本經に本經の說處を明かして、如來加持廣大金剛法界宮といへり。卽ち大日如來の住し給ふ國土は、これ大日如來自らの大威神力より現せしものなるが故に如來加持といひ、また大日如來の無相絕對なるが如く、所住の淨土もまた遍一切處にして、能住の人と所住の國土とは一體無二なるより、廣大金剛法界宮と云ふ。かく大日の淨土は遍一切處の境なるも、本經の疏には色界の最頂天これ大日如來の淨土なりとせり。金剛頂經には、阿迦尼吒天 Akaniṣṭha といひ、本經には摩醯首羅天 Maheśvaraḥ 卽ち大自在天王宮と云ふ。名異なるも共に色界の最頂の天たる色究竟天なり。大日如來の淨土は三界六道を超越すると共に、三界六道皆これ如來の淨土たらざるはなし、しかるに三界中特に色界最頂の色究竟天を大日如來の淨土なりと云ふは、色究竟天はこれ他受用身の淨土なり、今法身大日如來の淨土を、他受用身の淨土に寄顯して、色究竟天これ大日如來の淨土なりと云ふ。また色究竟天はこれ色相殊妙の天なり、而して大日如來は無量の微妙なる色相を具す、この大日如來微妙の色相を具し給ふことを表せんとして、殊に色究竟天これ大日如來の淨土なりと云ふ。色究竟天これ大日如來の淨土なりと云ふも、而も大日如來の淨土は、この色究竟天を超越せるものなれば、其の實三界中の色界に屬するものにあらず、この意を本經の疏に釋して

今此の宗に明す義は、自在加持神心の所宅なるが故に、名けて、自在天王宮と云ふなり。謂く如來有應の處に隨て此宮にあらざるはなし、獨り三界の外に在るにあらず云云。

金剛頂經に大日如來の淨土を色究竟天と云ふは、大日如來に無盡の色相を具し給ふことを現はし、大日經に大自在天王宮と云ふは、大日如來の大自在神變の心王の住し給ふ境なるゆゑである。隨て大日の淨土はたゞ色界頂にあるのみにあらず、如來有應の處、皆これ大日如來の淨土なりとの義なり。こゝに如來有應の處とは、有應とは相應の義にして、如來感應のあるところ皆これ大日如來の淨土なり、また色心相應、理智相應の境、皆これ如來の淨土なりとの意である。更に經には大日如來の淨土の相と、如來の住し給ふ獅子座の義を說いて

如來信解遊戲神變より生ずる大樓閣寶王は、高くして中邊なし、諸大妙寶王を以て種々に間飾せり。菩薩の身を獅子座とす云云。

大日如來もと菩薩の道を行じ給ひしとき、一體速疾力三昧を以て、あらゆる一切の善行を悉く成就し具足せり。この

功德力に因り、秘密莊嚴の淨土を感得し給ふ。如意寶珠の一切の寶中の王たるが如く、大日の淨土は一切世界の中に於て、最上無比の境にして、淨土の無量微妙の莊嚴の相は、皆これ如來の神變加持力より顯現し、一々の妙相これ如來內證功德の表象なれば、見聞觸知皆これ如來の眞身に契合する法門ならざるはなし。

また如來の住せらるゝ座を獅子座と云ふは、獅子は衆獸中に於て獨步無畏にして、諸獸の王たるが如く、如來は九十六種の外道の中に於て、一切降伏し獨步無畏にして、實に人中の獅子なれば、その所住の座を獅子座と云ふ。但し今密教にて大日如來所住の座を獅子座と云ふは、大日如來は勇健の大菩提心を體とせることを表するものである。即ち精進の大勢力を以て、一切衆生を悉く濟度し盡さずば止まざる大勇猛の本誓三昧に住し給ふことを表するものである。以て大日經は因に約すれば、衆生の淨菩提心の開顯の道を說くものにして、果に約すれば、如來の自覺內證より神變加持の妙用を顯示する秘義を說くものなることを知るべきである。

五、大日如來の眷屬

大日如來が金剛法界宮に住し給ふとき、唯如來一人のみ住し給ふにあらずして、無量の眷屬が大日如來を圍遶し、大日如來はこれら妙眷屬の爲めに、三世常恒に、三密平等の法門を演說し給ふのである。隨て經には住處成就に次で、眷屬成就の義を說けり。眷屬は無量なるが、この無量の眷屬は、皆これ大日如來の無盡の大智慧と大慈悲の德を表現せるものである。疏の眷屬の秘義を釋する文に

心王所住の處には必ず塵沙の心數あつて以て眷屬たり。今心王の毗盧遮那自然覺を成ず。爾時一切の心數即ち金剛界の中に入つて、如來內證の功德、差別智印と成らざるはなし。是の如くの智印は唯し佛と佛とのみ乃し能く之を持し給へり。菩提義に約すれば、即ち無量無邊の金剛印あり、佛陀義に約すれば、即ち無量無邊の持金剛者あり、此の衆德は悉く皆一相一味にして、實際に到る故に集會と名く云云。

心王の大日如來に無量の心數あり、而して心王の大日如來大覺を成じ給ふとき、無量の心數皆如來の自覺內證に連なり、如來內證の功德を表現するのである。密教には人法不二の秘義を明すが故に、無數の心數が即ち無量の人格體である。此等無量の心數は心王の大日が大覺を成し給ふとき、同時に覺を成じ、大日如來の大曼荼羅の系統に羅列せるのである。一相一味(ニシテ)到(ニ)於實際(ニ)即ち先天本具の靈覺を體得し、大日如來の眷屬として、如來說法の會座に羅列し給ふのである。胎藏(五)四重圓壇の曼荼羅の聖者、皆これ大日如來の妙眷屬である。而も今眷屬成就の說段には大日如來の自證の大智慧を主どる內眷屬と、化他大慈悲の德を主どる大眷屬とを明かす、蓋し內大二眷屬を擧げて、胎藏曼荼羅の聖者を攝盡せるものである。內大二眷屬は同じく大日の眷屬なれども、敎主大日に對して自ら親疎あるが故に、內眷屬は曼荼羅の第一重に居し、大眷屬は大悲化他の德を主つて第二重に居す。而も內大二眷屬等しく內に向つては大日如來に對して自受法樂の妙業をなし、また外に向つて、大日如來の自性法界宮に相應の人を引いて、大日如來の化益を被らしむるものである。此等の眷屬は或は發起衆として未悟の相を現じ、金剛薩埵となつて、大日如來に內證甚深の法門を發問し、或は影向衆として如來の說法を聽聞し、當機衆として正しく如來說法の會座に在て、如來の說法を聽聞して深益を得、或は結緣衆として、本經の會座に於て深益を得て成佛し能はざれども、未來に利益を得ることを明す。しかして此等は皆大日如來の內證の功德を表現せるものなれば、此等眷屬の德性に依て、大日如來の自覺內

證の體性を知るべきである。

六、內眷屬十九執金剛

上述の如く大日如來の無量の眷屬を內大の二眷屬に分ち、その內眷屬に十九執金剛あり、その大眷屬に四大菩薩あり、此等はその上首を擧げしものにして、もとより無數無量の眷屬存す。しかして內大二眷屬一應相望すれば、前叙の如く內眷屬は如來の智德を主どるものにして、大眷屬は化他慈悲の德を主どるものなれども、再應は共に悲智を圓具す。今十九執金剛を略示すれば、先天本有の靈性たる淨菩提心體は、分別を離れたる淨虛空の如き體なる義を表するものは、第一の金剛にして、第二の金剛は淨虛空の如き無相の菩提心に、精進の大行あることを明す、卽ち無相の菩提心は、大神通を起し、常に進んで萬行を修す。疏に第二虛空遊步執金剛を釋して、遊步はこれ不住の義、勝進の義、神變の義なり、淨菩提心は一切法に於て都て所住なきを以て、而も常に進んで萬行を修し、大神通を起す、故に虛空遊步と云ふ。第三の金剛は分別を離れたる菩提心體に（第一金剛）契合して大慈悲の萬行を成ずるところに（第二金剛）菩提の果德出生するを明す。第四の金剛は菩提心の萬德開顯の義を明すものにして、第五の金剛は化他大慈悲の行を明す。第二の金剛も化他の行なるも、未だ究竟せず、第五は菩提の大果顯現し、萬德開顯の上の大慈悲の行である。上來第一より第五に至る五金剛はこれ發心、修行、證菩提、入涅槃、方便爲究竟の五轉の次第にして、これ菩提心開發し、その眞性の顯現する道程である。かく一より五に至る次第に依つて菩提心の開顯を示すも、而もこの五轉の次第は、衆生の菩提心の開顯を明かすにあらずして、如來內證の功德の開顯を示すものなり。しかして如來內

證の果體に於ては、五轉の次第は同時圓具せることを顯はすものは第六の金剛である。第七八九の金剛は如來の大慈悲化他の果德にして、第七は一切衆生に同體大慈悲の心を起す深旨を表するものにして、第八は衆生救護の無限の大勢力を表す。第八金剛を特に那羅延力執金剛と稱し、大日如來を那羅延 Nārāyaṇa 卽ち天上の力士に喩へ、以て法身の無限力を顯はす。第九の大那羅延力執金剛とは法身大日如來には極重惡人所謂一闡提 Icchāntika の衆生をも救度し給ふ大自在力あることを表し、第十金剛は如來は無上の一切の功德圓滿せるを表し、第十一の金剛は法身には、衆生をして速疾に成佛の大果々得せしむる德あるを表し、第十二は菩提心は一切の障を離れたるを表はし、第十三は如來の智力は難斷の根本煩惱を斷ずる德あるを表し、第十四は如來は大慈悲を以て、身を莊嚴し、一切を攝取するを表し、第十五は諸佛の德は、法身大空の自體より生ずるを表し、第十六は大空三昧に住して平等眞實智の生ずることを表し、第十七は、如來の差別智を表はし、第十八は一切諸法を了々に觀察し、見聞觸知罣礙なき德を表はし、第十九の金剛手秘密主は、十九執金剛の總體にして、大日如來の不可思議神通の身口意の三密の體を主どる尊である。

是の如き十九執金剛を上首として、無量の眷屬在ます。此等の諸眷屬は、一切衆生の根機に相應の法門を以て、衆生を引攝し給ふ。若し人あつて此尊に歸命し、此尊の三密門を修するときは、此等一門の尊に契合すると共に、普門大日の本果の德を成ぜらるべきである。

七、大眷屬四大菩薩

經に十九執金剛の內眷屬に次で、大眷屬の四大菩薩を明かす。而して內眷屬は十九執金剛を上首として、無量の眷

屬あるが如く、大眷屬も四大菩薩を上首として、無量の眷屬存す。第一の普賢菩薩は如來の身口意は純一妙善にして一切處に遍し、また菩提心より起る、無量の行願も一切に遍することを表し、第二の彌勒菩薩は慈悲を表し　第三の文殊菩薩は智を主さどり、第四の除一切蓋障菩薩は煩惱を斷ずる德を表す。これ自證の菩提（普賢）より、慈悲の化他門（彌勒）に出で、說法斷疑（文殊）により、煩惱を斷ずる（除一切蓋障）次第にして、これまた大日如來の化他果德の顯示である。

八、所說の法門

大日如來は內大二眷屬、乃至胎藏曼荼羅四重圓壇の聖尊に圍繞せられ、三世常恒に、三密平等の法門を說き給ふのである。疏に三密平等の義を釋して曰く、

如來種々の三業は、皆第一實際妙極の境に至れり。身は語に等しく、語は心に等し、猶し大海の一切處に遍して同一鹹味なるが如し、故に平等と云ふ。（中略）卽ち平等の身口意、秘密加持を以て所入の門とす。謂く身平等の密印、語平等の眞言、心平等の妙觀を以て方便とするが故に、加持受用身を逮見す。是の如くの加持受用身は、卽ら是れ毗盧遮那遍一切身なり。遍一切身とは卽ち是れ行者平等の智身なり。是の故に此の乘に住する者は、不行を以て而も行し、不到を以て而も到る。而も名けて平等句と爲ることは、一切衆生皆其中に入ぬれば、而も實には能入の者もなく、所入の處もなし、故に平等と名く、平等の法門は、卽ち此の經の大意なり。

經に說き給へる身口意三平等句の法門には、無盡の深旨が含まれてある。その一端を述ぶれば、妄分別を離れたる如

來の身心は平等一味である、不二統一の體である。而して如來平等の身心は第一實際の境、卽ち宇宙の眞實在體に通徹せるのである。または云ふべし、宇宙の眞實體は身心一味の法身の體である。かく法身の身心は一味統一の體なるが故に、身にも宇宙法界を表現し、心もまた法界を攝盡す。金剛頂經にこの法身如來の遍一切處の義を明し、

普賢法身一切に遍し、能く世間の自在主たり、無始無終にして生滅無く、性相常住にして虛空に等し。

弘法大師この法身平等の義を釋し、

法身の三密は纖芥に入れども迮（せま）からず、大虛に亘れども寬からず、瓦石草木を簡（えら）ばず、人天鬼畜を擇（えら）ばず、何れの處にか遍せざる、何物をか攝せざらん。

如來の身心の如く、一切衆生の身心の自體も、平等一味にして、一切處に遍するも、無明煩惱の爲めに、その自體を知り得ないのである。この平等の身心の實性を體得する道を說くものは本經である。

先きに一般の佛敎は有限より無限に至る義を說くものなるも、密敎は如來無限の果體に直入直證する敎なることを述べしが、これは一般佛敎と密敎と一應立場の相違あることを示したるものである。その如來無限の果體に直住直證すると云ふ密敎にても、再應その實修の方面よりいへば、己れを捨てゝ如來に歸命し、如來平等の身心を體得する旨を說くものである。而も密敎にて自身を捨てゝ如來に歸命し、如來の眞性を體得すとは、自身本來、如來の果體に住することを自覺するを云ふのである。卽ち如來のうちに己れを空うし、如來の眞性の自身にあるを體得するのである。赤子が慈母の懷に居て、母を忘れて泣きつゝあるやうに、我等は如來の眞心のうちに居ながら、如來を忘れ、自ら悲み、かつ迷ひつゝあるのである。しかして密敎にて自身を捨てゝ如來に歸へり、如來に歸命すとは、壇上に安置せる佛像

に向つて禮拜することでもなければ、また遠き淨土に在ます如來を信念することでもない。壇上に在ます佛體は、衆生の六識を以て知り得らるゝ身であるから、これ應身佛である、他方淨土の如來は第八識を以て見る報身佛にして、共に衆生の主客能所の分別念を以て知る相對の假佛である。密敎に明す法身如來とは、かゝる分別念を以て見る假神假佛でない、その身心一如にして、宇宙法身に遍在せざるなき絶對の眞佛である。この絶對の法身大日如來に歸命し、煩惱業に因て得たるこの生死の生を捨てゝ、如來常住の生を得するには、如何なる道に依るべきやと云ふに、そはたゞ如來と己れと隔たれると思ふ、この分別の念を除くことである。主客能所の細分別たる根本無明を滅することである。あたかも鐵と磁石とを隔つる障害物を除けば、鐵は自ら磁石に牽かれるやうに、根本無明を除けば、我等は法身の平等の三密の體性に冥合するのである。その根本無明を除く秘義を本經に說いて、阿字大空三昧に住すべきを明す。かゝる釋文を本經及び本經の疏のうちに求むれば、枚擧に堪へないほどであるが、今その一文を擧ぐれば

自身を捨てゝ諸佛菩薩に奉獻す、何を以ての故に、若し自身を捨れば則ち彼の三事を捨つと爲す。何等をか三と爲す、謂く身語意なり。（中略）行者身の實際の中に身不可得なり、即ち如來の解脫なりと觀ず、是の故にことごとく此身を捨てゝ用ゐて、一切如來に施す。此より以後の動止施爲、凡そあらゆる所作は皆如來解脫の爲めにして、己身の爲めにあらず云云。

即ち捨つる自身、諸佛に奉獻する自身は、これ身語意の統一を缺き、身心一如ならざる自身である。この自身を諸佛に供養するとは、身心の不可得を觀じ、阿字の大空位に住することである。こゝに煩惱業に因て得たる生死迷妄の生を捨てゝ如來眞實の生を得するのである。それより以後の一切の所作は、これ凡夫の作業にあらずして、衆生を濟度し、

佛國を建設する如來の妙行である。しかれば密敎にては、たゞ無想無念にして法身を觀じ、報身應身佛を信奉せないのであるかと云ふに、法身を本とせる法報應の三身一體の報應身は、固より信奉するのである。法身を離れたる應身は眞實性なき偶像である、法身を離れたる報身は實在性なき假佛なるも、法身は遍一切の身なるが故に、報應二身も法身と同じく、遍法界身である。法身は遍一切處にして、宇宙の一切は法身の具德を表現せる象徵でないものはない。隨つて色聲香味觸法の六塵の萬境、法身如來に契合する機會となる法門でないものはない。而も多くの人は、如實修行に依り、佛心を體得せる敎祖を通じ、或はまた法身より示現せる報應身の三密門を修し、如來の境に得入し易いのである。即ち如來平等の三密を修し、如來と感應道交の三昧に住するとき、如來の加持力に依り、自ら生佛而二の隔執除かれ、我身即佛の自覺を成ずるに至るのである。しかれば密敎に依つて修行するものは、所謂自身を捨てゝ阿字の大空位に住すると共に、如來平等の三密門を修すれば、直に法身平等の三密門を體得せらるべきはずなるも、分別の細念容易に除き得ず、この分別の念に依るが故に、報應等の加持身を見るのである。この感應の事實に即して、阿字大空位に住するときは、感應の事實を超越する絶對法身を見、つひに我身即法身の大覺を成ずるに至るのである。

されば修行門の要は、無執無念にして主客能所の細念を絶し、直に法身平等の三密の自體に住すると共に、報應の加持身を高く法界の頂きに尊信すべきである。これを不信にして而も信ずとも、無念にして而も念ずとも云ふ。無念にして法身に住し、而も身外の加持身を信ずるとき、報應の加持身も、自ら時空の限量を絶し、加持身の當體に即し、遍法界の法身を體し得らるゝのである。即ち心、佛、衆生の三法等しく法身如來平等の三密の備性に住する眞理趣を體せらるゝのである。

（一）密教に佛身を自性法身、受用法身、變化法身、等流法身として說くことあり。自性法身とは一切如來の本身にして、三世常恒に法身の淨土たる自性法界宮に住し、果界の聖者と共に、自受法樂の爲めに、三密平等の法門を說ける大日如來なり、この大日如來に理法身卽ち胎藏の大日如來と智法身たる金剛界の大日如來とあり。受用身とはこれに自受用身と他受用身とあり、自受用身は上の智法身と同體にして、他受用身とは、十地の菩薩の爲めに法身內證の法門を說く佛身なり、變化身とは地前の菩薩、聲聞、緣覺、六道の凡夫等に對し、その根機相應の法を說く佛身にして、釋迦如來の如く、人間に應同せる佛身である。等流身とは忽ち現じ、忽ちに隱るゝ佛身を云ふ。或は空中に佛身を見、或は神を見たりと云ふが如きは、この等流身に屬す。また佛身を示さず、人天等九界の衆生と類を等うし、各々衆生を濟度する尊なり。

（二）四諦とは苦、集、滅、道にして、苦とは現實の境、集とは現實の境を感得せし原因たる煩惱と業なり、滅とは苦界を解脫せし理想境にして、道とは煩惱業を斷除し、滅諦に到達する修行を云ふ。

六度とは、布施、持戒、忍辱、精進、禪定、智惠の行を云ふ。

（三）五轉とは、發心、修行、證菩提、入涅槃、方便爲究竟の五位である。この五轉は凡夫が發心修行して、佛果に至る從因至果の道程を五位に分ちしものなるも、佛果の萬德を顯現する次第たる從果向因の義も五轉として說くことあり。而して今の五轉は表て從因至果の道程を明すものなるも、最初發心の位に、深く佛心に契合せば、行者の從因至果の次第も、さながら佛果の功德を顯現する從果向因の次第たるなり。

（四）三句とは、菩提心爲因。大悲爲根。方便爲究竟。これ本經に說かれたる主要なる法門である。菩提心爲因とは主客能所の妄分別を絕し、一心の本性に住するをいひ、大悲爲根とは、大慈悲の行なり。方便爲究竟とは一心の本性に住し、大慈悲の行を成ずるに依り、如來法身の大果を成就するを云ふ。

（五）胎藏四重圓壇とは、密教に大日如來の果德を明すに、金剛界の曼荼羅・胎藏の曼荼羅とを說く、その胎藏の曼荼羅に初重、二重、三重、四重重位の次第あるを云ふ。

（六）一門とは、慈悲とか、智惠とかの一德を主どる尊にして、普門とは萬德圓滿の大日如來を云ふ。

別序

一、神變加持の示現

本經の序に通序と別序とある、其中上來通序を釋せしゆゑ、以下別序を叙する。通序には本經の敎主たる大日如來が、その所居の淨土たる自性法界宮に於て、十九執金剛及び四大菩薩等の無量の眷屬の爲めに、三密平等の法門を宣說し給ふこと等を明かす。しかして別序には大日如來將さに自證の法門を說かんとするに當り、自證の本質より、無盡の身口意の三密を奮迅示現し、普ねく法界の衆生を度脫する相を開演す。例へば獅子が將さに震吼せんとするとき先づその身を奮迅し材力を呈現して、後に聲を發するが如く、大日如來も將さに自覺內證の法門を宣說せんとするに當り、所謂身口意の三無盡莊嚴藏を、十方世界に奮迅示現し給ふのである。卽ち大日如來自證の體より、無盡の加持身を普ねく一切の世界に示現し、一切衆生に應同し、相應の法門を說いて一切を救濟する、化他の靈用を現し給ふのである。こゝに於て大日如來の說法の會場たる自性會に居する大衆は、この廣大なる化他の靈用を見、この神變加持の化他の靈用は、これ如來の自證の本質より現せし影像である、影像すら神力廣大にして測るべからざること此の如し、その如來の自證の體の如何に廣大無邊なるべきかに想到し、三無盡莊嚴藏に感動するのである。此の如く不思議の佛事を感見せしめ、大衆を感動せしめ、以て說法せば、聽く者深くその敎旨を信樂倍增し、早くその理趣に悟入するのである。

二、瑞相の三身と隨他の三身

大日如來が將さに自證の法門を說かんとして、三無盡莊嚴藏を奮迅示現し、廣大なる瑞相を、大日の淨土たる自性會に住する大衆に感見せしむるは、これ自性會の大衆を感動せしめ、如來所說の法門に於て、信樂倍增せしめ、自證の法門に悟入せしめんが爲めなるも、而も一面より見れば、大日如來の奮迅示現し給へる三無盡莊嚴藏は、自性會の大衆を感動せしむる法益あるのみならず、自性會以外の加持塵土世界、即ち未だ時空因果の束縛を離れざる十方世界の一切衆生に對し、攝化利生の法益を垂れつゝある、如來の化他大慈悲の妙用そのものである。所謂三無盡莊嚴藏とは、大日如來の自證の本質より無量の身口意の三密、即ち受用、變化、等流の諸尊を一切世界に示現し、一切の衆生に對し、各々相應の法門を說き、等しく佛果を得せしむる如來の神變加持の妙用である。此の如く大日如來より十方世界の一切衆生を救濟せんが爲めに示現せし、無量の佛身を隨他の三身とも云ふ。この隨他の三身が十方の世界に於て、一切衆生を救濟しつゝある相貌が、大日如來の淨土たる自性會に現じ、自性會の大衆を感動せしむるを瑞相の三身とも云ふ。即ち大日如來より奮迅示現せる三無盡莊嚴藏の體に、瑞相の三身と隨他の三身との二の妙用がある。其故は隨他の三身が塵土世界に於て、各々の機根に對し、三密平等の法門を說き、各々の機根をして法益を得せしむるその相貌を、大日如來の神力に依て、自性會に現ぜしめ、自性會の大衆に感見せしむるを瑞相の三身といひ、また自性會の瑞相とも云ふ。元來自性會とは大日如來の自證の光明に照らされ、一切の世界が一佛國土となり、そこに住する人は皆如來の德を表現せる聖者なれば、久しく已に如來內證に通達せり、かゝる久已通達の人に對しては、固より瑞相を現じて感動せしむる要なかるべきも、本來自性の淨土に住しながら自ら隔てゝその所住の土の眞相を知らざるものが、たま〳〵宿緣開發し如來の敎誘に依り、所住の國土、自體本然の具德に目ざむるもの、即ち初めて自性會へ引誘せらるゝ人に對して、瑞相を現じ感動せしめ給ふのである。されば大日如來所現の三無盡莊嚴藏を、自性會の大衆の感見する邊よりは瑞相の三身といひ、塵土世界の機根を利益し給ふ邊よりは隨他の三身と云ふ。

瑞相の三身と云ふも、隨他の三身と云ふも、これ大日如來の自證の體より顯現せる、神變加持の化他の業用である。而して自證の體より化他の業用を現ずと云ふも、これ體より用を現ずる一應の次第を明かせしに過ぎず。その實際よりいへば、自證成佛の體と、化他の神變加持の業用とは、同時俱存にして、その不離なること、宛も日月の體と光明の用との如し。即ち大日如來は法爾として自性會に住し、自性會の大衆の爲めに三世常恒に、三密平等の法門を說き、隨他の三身は三世に常に塵土世界の衆生に對し、各々相應の法門を說き、この隨他の三身の妙用が、常に自性會に現じて、瑞相の三身として、自性會の大衆を感動せしめつゝあるのである。

三、別序經文の略述

疏に自性法身の本質より周ねく十方世界に無量の佛身を示現し、その所現の一々の佛身にまた無量の菩薩金剛等の眷屬あり、此等の佛、菩薩、金剛等の諸尊各々十方世界に遍滿し、衆生の分別の念を以て知るべからざることを明かさんとして、如來秘密慧經を引用して曰く、或るとき除蓋障菩薩が釋迦如來の身量を知らんとして神通第一と稱する目連尊者をして之を尋ねしむ、こゝに於て目連尊者佛身の量の限りを知らんとして、上界の梵天宮に至つて佛身を見

るに、佛身の威儀、說法の音聲等なほ地上にて見るが如くにして異なることなし、乃至その神通力を盡して、他方の佛土に往詣するに、さきに梵天宮に見しとまた異なることなし、こゝに於て除蓋障菩薩、目連の神通力を以て、如來の身量、說法の限りを知り得ざるが故に、自ら神通力を以て觀察せんとし、十方無量の世界を過ぎて如來を見るに、如來依然として地上に在つて座を起たずして說法し給ふと異ならざるを見る、かくしてその神通力を盡くして、十方を極めて之を尋ぬるに、つひにその身量、說法の音聲等の限りを知るべからず、しかして歸り來りしに除疑天女と云ふあり、禪定に住するを見る、思へらく、この天女は無量の禪定に通達せりと、今何れの定に住するかを知らんとし、心力を盡くして之を觀るも、その心の所行の處を測るべからず、こゝに於て無量の天女を集め、神力を以て同時に聲を發して、出定せしめんとするも、出定せしむる能はず、依つて之を如來に問ひ上るに如來の言はく、我れ未だ菩提心を起さゞる以前より此天女は已に久しく此三昧に住せりと。まことに如來の身口意は法界に遍滿して、無邊際である。されば疏には我等は分別の念を以て如來を見るを得ざるも、身器を淸淨にして、無念にして如來を念じ、如來の威神力を蒙るとき、十方の諸佛を見ること晴夜の雲無きに仰いで衆星を見るが如く、法音をも了々に之を聞くことを得、此の如く如來の加持力に依て如來の境界を感見することあるも、如來の眞身は本來、顯隱、去來等の相を超越し、本來常住、周遍法界にして本質の大日如來に異なることなし、即ち本質の自性身の本有常住、周遍法界なるが如く、三身もまた本有常住、周遍法界にして去來生滅の相を超越せり、隨つて之を感見すと云ふも、今始めて生起せしにあらず、經に此義を說いて

毗盧遮那佛の身、或は語、或は意より生ずるにあらず、一切處に起滅するも、邊際不可得なり。

といへり。即ち生滅來去の相あると見らるゝ、影像の身も、本質自性身の遍一切處、常住不滅の身に異ならざるを以て、常に生滅の相を超越す。而もまた緣に隨つて無量の佛身を十方世界に顯示して、衆生を救攝し給ふことを明して曰く、

而も毗盧遮那の一切の身業、一切の語業、一切の意業、一切處、一切時に有情界に於て眞言道句の法を宣說し給ふ。しかしてたゞ佛身を示現して、衆生を救濟し給ふのみならず、菩薩、金剛等の諸尊、乃至諸の天神、八部衆等の身をも示現し、緣に隨つて衆生を攝護す。隨て曼荼羅の中に天神八部衆は、自性身より現ぜし影像なれば、何れも衆生をして佛智見を開かしむるにあるも、天神等は一應世の實迷の天に同じて、其相を現ずるが故に、これを信ずる人は、その尊の當位を超越する大空無相の淨菩提心觀に住せずば、却つて世の實迷の天魔外道の類に同じ、所謂迷信に墮することゝなれば、低き天部を信念するものは、特に無相の菩提心に住し、信念淨化の工夫を要す。疏にこの義を釋して、

乃至諸天八部五通の神仙なり、外現の曼荼羅の表示する所を以て例して知ぬべし、是の如く等の種々の因緣無數の方便、普門應現して群生を敎化す、深淺不同にして麁細異なること有りと雖ども、然も其實事を究むれば、秘密加持にあらざることなし。各々能く如來の淸淨知見を開示す。若し是の如くの實相印を離ぬれば、餘は皆愛見所生なり。天魔外道の輿めに、諸の營侶と作る。豈に名けて淸淨句義と爲ることを得んや。

次に經に本質の大日如來より示現し、普ねく十方世界の衆生に應同して、化益をなす、受用、變化、等流の隨他の三身に歸命し、此等諸尊の三密門を修すれば、一生に成佛せらるべき得益あることを明す。即ち他の三乘一乘等の敎

に示す、止觀、六度等の行を修するものは、身命を惜まず、無數劫を經て之を修するも、或は成佛するあり、或は成佛せざるあるも、眞言の法門に依つて本尊の三密を修するものは、感應道交、入我々入の秘觀に依るが故に、現身に本尊の三昧に契證し佛位に超入せらるべきを說く。

正宗分

一、三句の發問

上來通別二序の釋了りしゆゑ、以下本經の正宗分に入る。本經の正宗分に、三句の法門と九句の法門とが說かれてある。その三句の法門は金剛手の發問に答へて說かれたるものである。隨つて如來の三句答說の前に、金剛手の三句の發問がある。この金剛手の三句の發問は、前の別序に說かれたる三無盡莊嚴藏、奮迅示現の瑞相に因みて發起せしものである。卽ち如來の自證の體は、設ひ如來の神力を以てするも、人に示すことが出來ない。前に如來自證の體より三無盡莊嚴藏を示現し、普ねく法界の衆生に應同し給ふ、如來の妙相を現ぜしも、これは如來の自證の體より現ぜし、衆生化益の相であつて、如來自證の體そのものではない、自證の本質より現ぜし化他の影像である。されば分別の細念を離れざる因人にあつては、たゞ影像を以て自證本質の廣大なることを想像するより外に途ないのである。疏に其の意を述べて曰く、象を見ざれども、象迹を見れば、その象は衆獸に超絕して、必ず身力廣大なることを知らるゝが如く或はまた迅雷、雨を澍ぎ鳥獸をして震死せしめ、百川奔涌して山を懷ね陵に襄る雲雨を起す龍あらば、その形を見さ

れども、その龍の威力の甚大なるを知らるゝが如く、普賢、金剛手等の諸の大衆も、大日如來の自證の本質は知り得ざれども、而も一念に法界の衆生の機根を知り、一時に一切衆生に應同する、廣大なる神變加持の化他の業用を見、化他の業用すら廣大なること此の如し、その自證本質の體如何に廣大なるかと想像し、而して如來はかゝる自證の體と化他の用とを如何にして成じ給ひしやとの不審を懷くのである。こゝに金剛手、大衆の疑問を代表し、如來に對して、如來は何を因とし、知何なる行に依て、此の如くの佛果を成じ給ひしやと問ひ上るのである。經に曰く

爾の時に執金剛秘密主、彼の衆會の中に於て、坐して佛に白して言さく、世尊云何か……一切智智を得給ふ、彼の一切智智を得て無量の衆生の爲めに廣演分布して、種々の趣、種々の性欲に隨て、種々の方便道を以て、一切智智を宣說し給ふ。或は聲聞乘道、或は緣覺乘道、或は大乘道、或は五通智道、或は願て天に生じ、或は人中及び龍、夜叉、乾闥婆に生じ、乃至摩睺羅伽に生ずる法を說き給ふ。若し衆生あつて佛を以て度すべき者には卽ち佛身を現じ、或は聲聞の身を現じ、或は緣覺の身を現じ、或は菩薩の身、或は梵天の身……人非人等の身を以て、各々に彼の言音に同じ、種々の威儀に住し給ふ。而も此の一切智智の道は一味なり、所謂如來の解脫味なり……世尊是の如くの智慧は、何を以てか因と爲し、云何んか根と爲し、云何んか究竟する

この文は前叙の如く、金剛手は如來自證の體より現ずる、化他無量の妙用は、皆これ一切衆生をして、如來の大果を得せしむる善巧方便なりとて、如來の神變加持の化他業用の眞意を了解し、その功德を歎じ、大衆をしてよく如來の自證化他の廣大なる功德を了知せしめ、大衆の機を失せず、如來に對し、自證化他の佛德成就の能起の因と、能生の根と、究竟滿足の佛果とを問ひしものである。經の文相より見れば如上の意義なるも、疏の釋文に依れば、金剛手が

如來の業用を領解し、如來の功德を歎ずる以上の文には、なほ下の如き深意存すとなす。即ち如來に對し、如何にして自證化他の廣大なる佛德を成就し給ひしやとの問ひには、我等一切衆生は、如何にして如來と等しき自證化他の德を成ずることを得るや、また此の問ひは大悲胎藏曼荼羅の秘義を開演すとなす。即ち曼荼羅とは如來の自覺の光りを以て一切世界を照らし、一切世界が此の自覺の體に統攝せられて、廣大なる一佛境界となると共に、化他大慈悲より神變加持の業用を、十方世界に示現するを云ふ、即ち自覺內證の體より、諸佛、菩薩、二乘、八部等の無量の諸尊を顯現するを云ふ。所謂佛乘を以て度すべき者には、佛身を現じて佛乘を說き、或は菩薩の身を以て度すべき者には、菩薩の身を現じ、或は緣覺の身を現じ、或は聲聞の身を現じ、或は梵天の身を現じ、或は帝釋の身等を現ず。しかして此等諸尊の德を成就せんとするものは、此等諸尊の各々の三密門を修すれば、加持感應の故に各々の尊の內證三昧を體得すると共に、一門即普門即ち各々の當位の果德に即して、當位を超越する普門大日の果に契證するのである。而して疏には大日如來の自證の體より示現せし諸尊の三密門を修し、つひに大日の果を成ずる所以を釋し、大日の心地に顯現せる曼荼羅の諸尊は、皆これ大日の具體の德を表現せるによるゆゑなることを明かし、更に大日の心地に顯現せる諸尊は大日の具體の德を表すればとて、もし曼荼羅の佛德を成せんとする我れ等衆生に、本來曼荼羅の德を具せずば、我等は如何に修行すればとて、曼荼の佛德を成じ得ざるも、我等は本來曼荼羅體である、所謂衆生の色心の實相は本際より已來常に是れ毗盧遮那平等智身なるが故に、曼荼羅の諸尊の三密門を修するとき、よく諸尊の果德を成就するのである。即ち如來を中心としていへば、一切衆生は大日如來の大覺を成じ給ひしとき、如來の自覺の光りに照らされ、大日の成佛と共に大覺を成就せしものである。此の如く一切衆生は、大日如來の自證の智光に照らされ、如來の自覺の體に連らなると共に、神變加持の化他の慈光に攝護せられつゝあるものである。如來の自覺の光りと化他の慈光とに統攝せられ救護せられ、如來の大曼荼羅の系統に連らなれるものである。かく如來を中心にしていへば、如來は救ひ手、我等は救はれ手である。如來は能加持者、我等は所加持者である、如來は能統攝者、我等は所統攝者である。然るに我等は如來示現の曼荼羅の諸尊の中の一尊に歸命し、其尊の三密を修行するとき、加持感應の秘觀に住するを得、しかして眞にその極致に達すれば、能所の相對を絕する不二一如の境界が開けるのである。こゝに至れば、一切の衆生は、各々自覺の體に於て、一切世界を統攝し、各々が中心となつて、曼荼羅を成立するのである。即ち入道の初めは能所相對あるも、道の眞源に達し、自心の本性を體するに至れば、自心自覺の光りに依つて一切世界を照らして、廣大なる佛境界となし、各々が中心となつて各々の曼荼羅を成ずるのである。疏にこの旨趣を釋して曰く

此の如く或は佛身を現じて種々の乘を說き、乃至非人の身を現じて種々の乘を說く、隨類の形聲悉く是れ眞言密印なり。或は久或は近、毒鼓の因緣にあらざるはなし。故に經に皆同一味なり所謂如來の解脫味なりと云ふ。然る所以は、一切衆生の色心の實相は、本際より已來常に是れ毗盧遮那平等智身なり。是れ菩提を得る時、强て諸法を空して法界と成さしむるにあらず　佛け平等の心地より、無盡莊嚴藏大曼荼羅を開發し、已て還て用て、衆生平等の心地の無盡莊嚴藏大曼荼羅を開發し給ふ。妙感妙應皆阿字門を出でず。當さに知るべし、感應の因緣所生の方便も亦復阿字門を出でず。譬ば大海の中の波濤相激て迭に能所たれども、然も亦皆同一味なるが如し、所謂鹹味なり。

次に經に金剛手が、大日如來の自證化他の廣大なる德を、地水火風空の五大に比況し、以て釋歎して曰く、如來一

切智智の體は、宛も世間の虚空の畢竟淨、無邊際、無分別なるが如く、如來の智身も一切の戯論を離れたり。また大地の一切衆生の所依たるが如く、如來も一切衆生の依止處たり。また火界の一切の薪を燒き盡すが如く、如來の大智の光明は、よく衆生の無知の薪を燒きつくす。また大風の烟雲塵霧を消除して、大虚澄廓、爲めに日月星辰炳現するが如く、如來の悲風も、またよく煩惱の塵霧を滌除して、涅槃清淨の法性を證せしめ、また水のよく草木を潤ほして華果を生ずるが如く、如來の智水もまた此の如く、よく衆生の善根を潤ほして、菩提の大果を成就せしむ。

金剛手が、かくの如く地水火風空の五大に比況して、大日如來の果德を釋敷せらるゝは、これ如來の威神力を蒙り本經の下の文の五字五大の實義を發起し、かねて曼荼羅の體を明すものなりとも解す。即ち弘法大師の說に依れば五大の實義とは地水火風空（色）識（心）の六大なり、この物心一如、色心不二、理智不二とは、これ我等衆生の分別思惟を絶せる、大覺の境地の體である。所謂如來の三摩地の體にして、これ曼荼羅能生の自體である。上來金剛手が如來の自證化他の功德を領解し、釋敷せらるゝは、これ一面より見れば、曼荼羅の實義を明すものである。が、今この五大の喩釋は、これ如來の神力を蒙り、大悲胎藏曼荼羅能生の自體を開說するものなりとも見らる。

金剛手が、大日如來の自證の體より、三無盡莊嚴藏を奮迅示現するは、これ衆生をして如來示現の曼荼羅に歸入せしめ、つひに衆生本具の曼荼羅を開發せしむるにあるを知り、よく如來示現の業用の眞相を領解し、其功德を歎釋し以て大衆が如來の業用を了知する生解の緣たらしめ、大衆の機を失せず、然して如來に問ひ上る、是の如く佛果は、何を以て因とし、云何んが根と爲し、云何んが究竟するやと。この因、根、究竟の三句の發問に對し、如來が因、根、究竟の三句の實義を開說せられたるものは、正宗分に於ける如來所說の法門の宗要である。

二、三句の答說

一

上述の如く、金剛手が大日如來に向つて、何を因とし、如何なる行に依り、自證化他圓滿の廣大なる佛果を成就し給ひしやとの、問ひに對し、如來は三句の法門を說き給ふ。即ち

菩提心爲レ因ト　（大信）
大悲爲レ根ト　（大行）
方便爲ニ究竟ト一　（大果）

經文に曰く

毗盧遮那佛、持金剛秘密主に告て言はく……菩提心を因とし、大悲を根本とし、方便を究竟とす、秘密主云何んが菩提とならば、謂く實の如く自心を知るなり……

即ち物の種子が、地水等の種多の外緣に助けられて、芽を出し、根を生じ、つひに果實を成就するに至る如く、一切衆生、佛性の種子を發生せしめ、つひに如來の大果を成ぜんには、信と行とに依らざるべからざることを說きしものは、三句の法門である。

三句の法門には種多の意義存するも、要約していへば、菩提心爲因は、一心の無相を觀し、大日如來自覺內證の體に契合し、深信の力を得るをいひ、大悲爲根とは、前の淨信心をして、堅牢增長ならしめんが爲めに、大日如來の自

證の覺體より、奮迅示現せる隨緣顯現の加持身に歸命し、その加持身の三密を修するをいひ、三密加持の修行に依り、無明妄執除かれ、自心菩提の體性、無相法身を如實に顯得するを方便爲究竟と云ふ。本經には入道の徑路として、多く如上の如く信、行、果と次第して說かれたるも、また三密の修行に依て、白淨信心を體得し、大菩提を成する行、信、果の義を明かす。菩提心爲因は能所主客の分別を絕し、因果を泯じ、直に一心の眞源を體得する實相平等門の說にして、大悲爲根と、方便爲究竟は、因、行、果の中の行、果なれば、因果差別門の方面に依る法門である。隨つてかの無所住の心に住し（菩提心爲因）大慈悲の萬行を修し（大悲爲根）大菩提を成ずる（方便爲究竟）理趣を明す、一般の大乘佛敎、卽ち空有相卽、止觀双修を開演せる佛敎の敎旨は、凡てこの三句の法門に該攝せらるべきものである。要するに三句の法門とは能所主客の分別の妄念を除き、能所不二、理智不二の菩提の體性に住し、如來自證の境に契ひ、大慈悲の行を成じ、自證化他圓滿の佛果を成ずる道である。卽ち菩提心の種子をして、如來の聖胎に託し、佛子として生れ、佛業を成ずる秘義を明すものである。

二

菩提心爲因の菩提心とは、一義の釋に依れば、發菩提心の意にして、無上の佛果を求めんとする心を發起するを云ふ、卽ち自證化他圓滿の廣大なる佛果を成ぜんには、先づ佛果を求むる心を發起するを、根本原因となす義を菩提心爲因と云ふ。しかれば菩提心爲因とは發心にして、廣義にいへば、人の初めて宗敎心を發すを云ふ。隨てこの發心に淺深重々の義がある。或は過境的の神の實在を信ずるもの、或は靈域に安置せる神、佛を信ずるもの、或は他方の佛土に住する佛陀を信ずるもの、或は主客能所の分別の念を絕し、遍法界の法身佛を直觀體達せんとする等、發心の內容一樣でない。が、而もこれを大別して二つに分つことが出來る、一は如來と人、または神と人との主客對立の關係の上に生ずる信仰、卽ち心外に存在する佛、菩薩、天神等を信ぜんとする發心にして、一はかゝる主客能所の對立の觀念を絕し、絕對法身を直觀體得せんとする敎へである。佛陀善神を、分別の心を以て信ぜんとするを地前の發心といひ、分別の念を離れ、念々無念に住し、直に一心の體性、無相無身に契證せんとするを地上の發心と云ふ。而して本經に說かれたる菩提心爲因には、かゝる地前地上、兩樣の發心の義存するも、本經の正宗よりいへば寧ろ地上の發心の義を本とす。一心の本性、如來大覺の體は、能所主客の分別の念を以て見る對立の世界ではない。隨てかゝる絕對の境地を照らす、菩提心の光りを智なりといへば、その智は簡擇的判斷意識でなく、能所主客の分別を絕する無分別智でなければならね、またかゝる境地を體驗するものは、信なりといへば、その信は能信所信の對立を絕する無分別の信であらねばならぬ。しかして本經の疏に多く無分別智、菩提心體に契合する旨を說くも、また往々菩提心體得の境地を、決定諦信といひ、堅固の信力を具す等と云ふ、信といひ智といひ共に無分別心、菩提心を體得せる心境にして同一體である。

但し菩提心の菩提 bodhi は覺と翻じ、その本體は、佛陀にあつても、衆生にあつても增減なき先天本有の靈覺の體である、卽ち本有本覺の心體である。しかして此の本覺の體が、自らを覺證せんとする歸本一念の淨心を起す。その後天始覺の發心に、上述の如く地前地上、或は心外に覺を求めんとする第六識發心、或は心內の覺を求むる第八識發心等重々の意あるも、始覺の念は惡を離れ善を求め、生死の苦を厭ひ、涅槃の眞樂を欣ぶに依つて起るものである

本經の疏にも、菩提心を釋し、一向志求一切智々といへり。しかれば能求所求異なりある對立の關係上に起る發心が、發菩提心の眞義のやうに見ゆるも、こは上述の如く、多く地前發心の意である。菩提心に能求の心と所求の菩提とに異なりあると見るは、これなほ道に入ることの深からざるものゝ所見である。深く道を修するに至れば、求めんとする菩提の體は、求むる自心なることが知らるゝのである。經に此の意を開說して

云何んが菩提とならば、謂く實の如く自心を知るなり……

といへり。しかして求むる無上菩提は、自心なりと云ふも、無上菩提は我等の分別の念を以て認識すべき境にあらざることを開演して

秘察主是の阿耨多羅三藐三菩提 Anuttara Samyaksambodhi は乃至彼の法として少分も得べきことあることなし。何を以ての故に、虛空の相は是れ菩提なり……

主客能所の一切分別の念を絶せる、不可得無相の體、これ菩提の體性である。かく菩提は不可得無相の體なりといへば、教意を得ざるものは、菩提とは虛無の體ならんと思はんも、菩提を無相不可得なりと云ふは、これ未だ分別の念を絶せざる、我等迷人に對しての如來の說示である。眞に菩提の體を體得せる佛陀 buddha よりいへば、菩提は一切世界中の唯一の眞實在である。大智大悲不二圓滿靈活自在の體である。本經の題目に云ふ、大毗盧遮那成佛、卽ち大日如來の自覺の體性にして、大智の光明遍く一切を照らし、大慈の光り一切の善根を成就せしめ、寂にして而も法界に遍せる體である。この菩提の體を或は大定、大智、大悲といひ、或は理智不二といひ、寂照不二といひ、本有本覺等と云ふ。而も本經には多く否定的說示に依り、無相、大空、不可得、一心等と云ふ。かゝる經旨よりいへば發菩提

心とは、眞に能所の念を泯じ、阿字の大空位に住する心境である。

しかしながら實相平等の理と、因果差別の義との不二一如を說く、大乘佛敎の本義よりいへば、發菩提心には苦を厭ひ樂を求め、迷を離れ悟を欣び、妄を捨てゝ眞に歸せんとする、能求所求各別の念と、生死卽涅槃、凡身卽佛の平等觀との二心は相並ぶべきものである。卽ち能所を絶し、無所住の心に住し、而も無限に進趣する向上の一路を明すものである。しかしながら、無所住の心に住して、進心息まざる菩提心の實義を體する人は、能所一如の菩提心を如實に體得せし、初地以上の菩薩の境地である。本經の疏に曰く

行者初發心の時に阿字門に入ることを得るときは、卽ち是れ如來金剛の性より芽を生ず。當さに知るべし、此の芽一たび生じて運々增長して、更に退の義なし……此の眞言法要に於て方便修行して初地に至ることを得、爾の時に無所住を以て進心息まず、第二地を滿せんが爲めの故に、復た眞言法要に依つて方便修行して、第三地に至ることを得、爾の時に無所住を以て進心息まず、第四地を滿せんが爲めの故に……

無所住の心に住し、自心の菩提の功德を開顯する境地に至らんには、無分別智を以て、この菩提心體を證見せねばならぬ。

涅槃經に衆人船に乘て大池に遊び、過つて持するところの瑠璃の寶珠を深水のうちに沒す。こゝに寶珠を得んとして、諸人水に入り、瓦石草木沙礫等を競うて捉り、各々寶珠を得たりと謂つて歡喜し、持ち出でゝ之を見るに眞珠にあらざるを知る。この時寶珠なほ水中にあり、しかるに寶珠には自ら水を清澄ならしむる作用あり、水澄むが故に珠體自ら顯はれ、宛も大空に懸かゝる月形を見るが如し、こゝに衆人中に一人の智者あり、安徐として水に入り

便ち珠を得たり……

この譬喩には種多の意を偶するも、分別の念を以て、絶對の境地に觸れんとするも、之を獲るを得ず、無分別の念、よくこの境に契ふことを語るものである。疏に曰く

今行者心の實相を觀ずることも亦復此の如し、一切の戯論を出過して、淨虛空の如し、內證の所行に於て深信の力を得、薩婆若の心、堅固にして勤ぜず、業受の生を離れて、眞性の生を成就す、萬行の功德此れより增長す、故に菩提心を因とすと云ふ。此の菩提心は、後の二句の因たり。若し生死の中の所殖の善根に望むれば、則ち名けて果とす……菩提心は卽ち是れ白淨信心の義也……

分別妄念を除くとき、自心の菩提の體に契ひ、如來大覺の內證に契合し、こゝに煩惱業に依つて得たる生死の生を離れ、如來眞實の生を體得するのである。この生死の生を捨てゝ、如來常住の生を得たるを菩提心爲因と云ふ。かゝる境地は一切佛敎の究竟の果德である。しかるを密敎にては、一切佛敎の果體を敎の出立點とし、菩提心爲因と爲し、この菩提心の功德を如實に開顯する義を明す。卽ち大悲爲根、方便爲究竟の果に對するが故に菩提心爲因と云ふも地前の敎を主として說く、一般佛敎に對せば菩提心爲因の位は果と云ふべきである。

こゝに於て、密敎は果界爲本の敎なり、本覺爲本の敎なり、如來の果德を開發する秘義を說く敎なり、本經の三句は地上の法門なりとの意を了すべきである。

本經の三句に地前の三句、地上の三句、地前地上合論の三句等種多の義を含むも、地上の三句を以て本とす。一般の佛敎は生滅因果の世界を脫して、實相平等の境地に歸入することを明すものなるが、密敎にては、生滅因果の世界

より、實相平等の境地に契合することを說くのみならず、更に實相平等の境地を體得し、その實相の果德を開顯する佛果の狀相を明かすものである。しかして因果の世界より實相平等の果體に契證する次第を因、根、究竟の三句として說くことあり、かゝる三句の說を地前の三句と云ふ、また實相の果體卽ち初地淨菩提心體を證得し、その果德を開顯する次第を因、根、究竟の三句として說くことあるを地上の三句と云ふ。

卽ち無相大空三昧に住するとき、能所の分別を絶し、能所一如の本有の大覺位を體得するのである。こゝに父母未生以前の自身に歸へるのである。眞妄和合以前の法性法爾の位に歸へるのである。意識以前の主客未分の絶對統一の眞實在に住するのである。かく自心の本性を體するとき、大日如來の自證大覺の體に契合し、如來の大曼荼羅の系統に列らなり、所謂一相一味到於實際の果人となるのである。しかして大日如來を主としていへば、一切は大日に統攝せられたるものなるも、自心を主としていへば、自心は法界を統攝せる法界の大王である。かく自己は法界を統攝せる目的統一の實在體なることを體得せるを菩提心爲因と云ふ。しかしてその本有の菩提の德を顯現する狀相を、大悲爲根、方便爲究竟といひ、かゝる秘義を明かすを地上の三句と云ふ。而もかくの如きは從因至果と云ふも、これ發心の初めより佛德を實現する、從果向因の義なりともいひ得らる。

三

本經の菩提心爲因の說段には、如來の果德を成ぜんには、たゞ自心の本性を如實に體得するにあり、卽ち實の如く自心を知るにありとせり。而して自心の本性の如何なるものなりやを釋し、自心は無相なりとせり。卽ち能緣の相も空

なれば所縁の相も空なり、また能所契合の體も空にして、自心の相として認むべきなく、自心の不可得空なることを說けり。

虛空の相は是れ菩提なり、知解の者もなく、亦開曉の者もなし、何を以ての故に菩提は無相なるが故に、秘密主諸法は無相なり謂く虛空の相なり……心は內にあらず、外にあらず及び兩中間にも心不可得なり……

經に無上の佛果を成ぜんには、先づ佛果を求めんとする心を發さゞるべからざるを說き、而も所求の佛果は能求の自心のうちに求むべきを明かし、如實知自心の秘義を開演せり。卽ち無相の一心を觀じ、大覺を成ずる道を明かす。而して疏に無相とは虛無にあらず、無限の尊とき內容を具せることを釋す。例へば經に一心は無相なること虛空の如しといふを解し、世間の虛空は一切處に遍し、淸淨、無分別の義あり、また虛空は無相なるが故に、萬有は空に依れども、空は所依なきが如く、一心の體は一切處に遍し、淸淨、無分別なり、しかして萬有は一心に依れども、一心は適さに所依なし、此の如く少分相似の義あるが故に、一心を世間の虛空に況するも、而も一心には無量無邊の功德ありと世間の虛空に比すべきにあらざることを明かす。

是の如く等の小分相似を以ての故に、以て無相の菩提心に喩ふ。然も是の中に復無量無邊の秘密甚深の事あり、實には世間の虛空の能く遍喩する所にあらず。冀くは諸の學者、意を得て筌を忘れよ。

其他疏には一心は一切處に遍し、萬有皆一心の具德なり等、一心に無盡の功德を具する義を明すも、弘法大師はかゝる經疏の無相の菩提心觀は、なほこれ凡夫の分別を除かんとする遮情否定の敎にして、分別妄念を絕するところに顯はるゝ、大菩提の一心の體を明かさゞるものなりとし、十住心論、及び秘藏寶鑰にはかゝる無相の菩提心觀をば、第八住心の法門とし、入佛道の初門なりとせり。

四

大日經の正宗に依り、弘法大師は十住心論に菩提心の實義、卽ち如實知自心の正意を述べて曰く

秘密莊嚴住心とは、卽ち是れ究竟して、自心の源底を覺知し、實の如く、自身の數量を證悟す。所謂胎藏海會の曼荼羅、金剛界會の曼荼羅、金剛頂十八會の曼荼羅是れ也。

卽ち分別の妄念を絕し、能所一如の自心の本性に住し、如來の自覺內證の曼荼羅の體に契合するを、菩提心爲因とす しかして自心の本性に住し、法身の內證に契合せる信念をして、堅固不動ならしめんが爲めに、法身の內證より示現せる神變加持の加持身を信奉し、その加持身の三密門を修するを大悲爲根とす。疏の釋に曰く

是の如くの淨信心をして堅牢增長ならしめんが爲めに、經の中に次に大悲爲根と說く……此の中に悲と云ふは卽ち兼て大慈を明すなり。且らく行者供養を修する時の如きは、若しは一花或は塗香等を奉るに、卽ち遍一切處の淨菩提心を以て、供養雲を興し、普く佛事を作して、悲願を發起し、群生に回向して、一切の苦を拔き無量の樂を施こす。自の善根と及び如來の加持と法界力とに由るが故に、所爲の妙業皆成就することを得、卽ち是れ普く一切智地と乃至無餘の有情界とに於て、皆悉く根を生ずる也。行者無住の心を以て修する所の萬行に隨て、卽ち大悲の地界に執持せらるゝに由るがゆゑ……爾の時に無量の度門任運に開發すること、なほし芽莖枝葉の次第に莊嚴するが如し、卽ち是れ一切の心法に於て因緣を具足する義なり。方便爲究竟とは、謂く萬行圓極して復た增すべき

ことなく、應物の權、能事を究盡す。卽ち醍醐の妙果三密の源なり。

行人の修行力と、本尊の大慈悲の加持力と、法身如來の自證大覺の法界の加持力に依り、修するところの善行、一切世界に根を生じ、永劫不盡の價値を生ず、かく加持瑜伽の行に依り無明妄執の消融するを大悲爲根といひ三密加持の修行に依り、眞に分別の妄念を離れ、自心の心性を刻證し、法身の大覺の體に契ひ、如來と共に、十方世界に無盡の三密門を示現し、衆生の救濟窮まるなきを方便爲究竟と云ふ。上述の如く三句は信に依て行を修し、行に依て果を成ずる次第なるも、また行に依て信を得、つひに大果を成ずることを得、卽ち法身の大覺の體より、奮迅示現せる加持身の三密門を修し（行）つひに法身本地の大覺の體に契ひ、自心の本性を體得し（信）如來の大果を成就す。疏に曰く

佛已に略して是の如くの心の實相印を說き給ふ。若し行者此れと相應するときは、當さに知るべし、已に堅固の信力を具せりと、然も此の信力は本と眞言門の供養儀軌行法に從て、說の如く修行して淨菩提心に至ることを得……

……

三、九句の法門

前叙の如く大日經は、大信、大行、大果、卽ち菩提心爲因、大悲爲根、方便爲究竟の三句の法門を經の宗要となすものである。が、この三句の義を更に明かにせんとして、金剛手が、九つの問を發し、如來この九問に答へ給ひしものは九句の法門である。隨つて以下本經の終りまでは、この九句の法門を說かれたるものである。本經の疏に

如上に佛、經の大旨を說き給ふに、心の實相門略して已に周備せり、時に金剛手、未來の衆生をして、方便を具足し、復た餘の疑ひ無からしめんが爲めの故に、偈を以て佛に問して、世尊廣く其義を演べ給へと請す、是の中に略して九句あり。云々

金剛手の九問とは

一、菩提心生（菩提心體の生起について）
二、菩提心相（菩提心の相について）
三、心續生（淨心の續生について）
四、心　相（妄心の相について）
五、時　（修行中に經る時間について）
六、功德聚（菩提心本有の功德について）
七、修　行（修行について）

八、異熟心（第八識について）

九、心殊異（修得の淨心について）

第一問の菩提心生とは、先天本有の靈覺の體たる本有の菩提心性より後天修生の菩提心の生ずる義を問ひ給ひしものである。

第二の菩提心相とは、性內に成ずれば、必ず相外に顯はる、卽ち菩提心生ずるとき、如何なる相貌あるかを問ふ。しかして第一、第二の答說は經に略答あるも廣答なし、思ふに第三の心續生の答說のうちに、第一、二の答意も自ら詳細に顯れるが故に、第一、二問の廣答なきか。

第三の心續生とは、これ淨菩提心生起して、如實に自心本有の靈覺の體を體得するに至る、淨心開顯の次第を問ふのである。この心續生の義は、最も近要の法門なるが故に、答說には略答と廣答とあり、また略廣の二答共に九句の中には第一に答へ給ふ。その廣答とは下に說かれたる八心、三劫の法門である。

第四に心の諸相とは、この心相は妄心の相にして、第二句の淨心の相と異なる。この第四問の答は廣答のみにして略答なし、この廣答とは下に說かれたる六十心、其他三劫、六無畏に淨心と妄心とならべ明かす中の所斷の妄心等である。

第五の所問の體は時なるが、この時とは行者發心より佛果に至るまでの修行中に經る時である。しかして經には特に時の答說として、その說文なきも、心續生の答說たる三劫段に、時の答說をもかね見るべきである。

第六の功德聚とは、菩提心の微妙の功德を發問せるものである。三句の中の如來の果體たる方便爲究竟の體である。百字果相應品所說の佛果の功德、或は住心品の十地の法門等この答說である。

第七は無上の佛果を成ずる修行についての發問にして、三句の中の大悲爲根の義である。この答說に略答と廣答とあるが、具緣品以下に明す三密の行軌がその廣答である。

第八の異熟識とは、第八識についての發問なるが、住心品の第二劫の阿賴耶識の說文の如きは、その答說として見るべきである。

第九問は心殊異にして、これ淨菩提心の功德の種々差別を問ふものなるが、住心品の十地の說段、及び百字果相應品等に初地以上の功德を明すものその答說にして略答なし。

以上金剛手の九問に對し、如來その問意に答へて、廣く分別して說かれたるものは、以下の經文なるが、その廣答に先きだち、最初に心續生、菩提心生、菩提心相、及び修行についての略答がある。而してその答へは九問を順次に答へられたるにあらず、或は後の問ひを先きに答へ、或は轉た疑問を起し更に義を盡して釋せらる。要はいそいで宗要を得せしむるにあり。

四、四句の略答

九問の中最初に第參、貳、壹、七の四問について略答あるは、この四句の意を明かせば、自ら九問の要旨を略示し得らるゝによるならん乎。

九問の順次に依らず、第三問の心續生の義を最初に說かる。心續生とは上述の如く、先天本有の靈覺の體より、始

生修覺の一念發起し、つひに自心本有の覺體を如實に體得するに至る信念向上の歴程を說くものである。經に

勝上大乘の句、心續生の相は諸佛の大秘密なり、外道は知ること能はずと說示せられ

本經の疏には

心續生の相とは、此の心は畢竟常淨にして、猶し虛空の一切の相を離れたるが如くなりといへども、而も亦因緣より起して、心相生ずることあり（中略）當さに知るべし、是の心は緣より起するが故に、卽ち是れ不生にして生じ、生にして不生なり、無相の相は、相常に無相なり、甚深微妙にして了知すべきこと難し、諸佛秘密の印なり、妄りに宣示せず云々といへり。

經の心續生の相は諸佛の大秘密なりとの、秘密の意に重々の深義あるも、一途の說に依つて釋せば、一心の自性は一切の妄念を離れ、なほし淨虛空の如く、純一無相、不生不滅にして常住の體である。而も因緣に依つて種々の心相を生ず、されば念々起動の心相は、これ一切分別を離れたる不生不滅の眞心の起動なれば、念々これ常住佛心の轉起である、念々これ本源的發動である。卽ち分別の妄念を離れ、直に一心の自性に住せば、念々これ常住不生の佛心の起動なり、淨心の相續なりとの秘義をば、經に心續生の相は諸佛の大秘密なりといふ。以上は心續生の略答の要旨なるが、後に心續生の廣答として、八心、三劫の義を宣示せらる。弘法大師は此の八心三劫の心續生の法門に依り、十住心を開演せり、卽ち心續生を十ケの法門として宣暢せらる。

次に經に第一問の菩提心生の略答がある、菩提心生とは淨菩提心の出生する義を明すものである、淨菩提心の生起といへば、上の心續生と同義のやう思はるゝも、心續生は地前（分別妄執を未だ全く離れざる位）地上（分別の細念を超度せる位）に亘り、淨心の生起を說き、菩提心生は地上、卽ち初地の菩提心の生起と及びその體得せる菩提心體の不生常住の實義を明すものである。經に

百六十心を越えて、廣大の功德を生ず、其性常に堅固なり、彼れ菩提生なりと知るべし。

といひ疏には

行者最初に金剛寶藏を開發する時、是の心性は淨虛空の如く諸の數量を超えたりと見る、爾の時、因業の生を離れて、佛樹の芽生ず、此芽生ずるときに、已に法界に遍ず、（中略）破すべからず轉ずべからず、猶し閻浮檀金の能く其過惡を說くことなきが如し、故に其性常に堅固と云ふ。

經に衆生の一切分別の妄念を百六十心として說き、この分別の妄念の離れたるとき、淨菩提心體卽ち本有の覺性顯現すること、なほし乳の精煉せられ、あらゆる滓穢を除かれ純なる醍醐味の生ずるが如く、眞に生死の生を離れ、如來常住の生を得、其性法界に遍じ、堅固常住なる無上大覺を成ずることを明す。されば疏に華嚴等の顯敎の諸經の中には、たゞ菩提心の功德をのみ歎ずるも、此の經には菩提心の體性を說くと釋せり。これ一般佛敎には、上み菩提を求め、下も衆生を度する、上求下化を以て菩提心の義となし、或はかゝる菩提心を生ずる、一念の功德深廣涯際なきを明し、或は主客能所を絕する空寂無相の理を菩提心體となし、未だこの無相の菩提心を如實に體得せる無上大覺の體を明かさゞるによる。しかるに當經にはこの無上大覺の體を說く、これ本經を一切敎王と云ふ所以である。

次に菩提心の相貌を說かれたるが、上の菩提心生に對して釋せば、菩提心生は菩提心の體を說くものにして、今はその相を明すものゝ方も見らる。而も體相不離の故にその義相通ずるものあり、疏にその菩提心相を釋し、世間何物も

淨菩提心の相に比況するものなきも、たゞ大虚空の小分相似せるものありとし、世間の虚空の烟雲塵霧の爲めに染汚せられず、その性常住にして、因緣を離れ、八方の大風世界を吹き盡くすも、また動せざるが如く、心相も亦しかなり、本來空寂無相にして、一法として能く染汚し、動搖せしむるものあることなく、常住不變にして、永寂無相である。一心は此の如く永寂無相なるも、而もこの無相の一心に不昧の靈知あり、光あり、行者此の寂光不二の一心の心相に滯執せず、却つてこの寂光の爲めに照らされ、如實に自心本有の大菩提を體得するに至るのである。即ち毘盧遮那の心佛現前するに至るのである。疏に此の意を釋して

爾の時、行人此の寂光の爲めに照らされ、無量の知見自然に開發すること、蓮華の敷けたるが如し、故に無量智成就と云ふ。此の智成就は即ち是れ毘盧遮那の心佛現前するなり、故に正等覺顯現と云ふ云々。

次に第四問の修行の義を略說し、上述の如く無相の菩提心を觀し、分別の妄念を離れ、一心の寂光に照らされ、如實に自心の大菩提を成せんには、眞言門の三密加持の行を修せざるべからざるを說く、即ち修行に依り、如來と感應加持の境に住せば、自ら分別の妄念消融し、毘盧遮那の心佛現前すべきを明かす。しかして此の修行は密教の事相にして、本經の具緣品以下に宣說せらる。

五、心續生の廣答

上述の如く九句の中、四句の略答にも、最初に心續生の義を答し、九句の應答にも、心續生の義を第一に宣說せらる。以て本經は衆生が本有の靈性たる自心の菩提に目醒め、その自覺漸次に增大し、つひに如實に自心の菩提の體を體得するに至る、淨菩提心の轉昇、即ち信念向上の歷程を明すを宗要とすることを知るべきである。しかして以下心續生の經の說相を見るに、三十種の外道、八心、六十心、三劫等の法門を說かる。三十種の外道とは、これ違理の迷心なるが、淨心生起の心續生の義を明かさんとして、先づ違理の迷心たる外道の說を出だすは、順理の淨心はこの違理の迷心を因由として生起することを示されたものである。次に八心とは世間の善心の生起を說かれたるものにして、六十心とは此の世間の善心と雜起する妄心である。次に三劫とは世間の妄心を除かれ、正しく生起する出世間の淨心の相續を明かせしものである。されば三十種の外道は、淨心生起の因由として說かれたもの、また六十心は出世間の淨心生起するとき除かるゝ妄心を示されたるものなれば、以下の釋相に三十種外道、八心、六十心、三劫の開說あるも、正しく淨心生起の心續生の義を宣示せられたるものは八心と三劫の法門なりと知るべし。

六、三十種の外道

經に淨心生起の因由を明かさんとして、三十種の外道を說く、しかして此等外道の說は何れも妄我執を本とせるものなるが、かゝる妄我の見は、我の眞實性を觀ぜざるより起る迷見なりとせり。

無始生死の愚童凡夫は、我名我有に執着して、無量の我分を分別す、秘密主若し彼れ我の自性を觀ぜず、我々所生す云々。

即ち違理の迷見は我執にあるが故に、この我執を除かずば、順理の淨心生ずるに由なし、しかして此の妄我の迷見を破するには、たゞ我の眞實性を觀ずるにあり、即ち一切法は衆因緣の所生にして、堅實の自性なく、我體畢竟無我空

なりと觀ずるにありとせり。違理の妄見より起る我見種多なるべきも、經に三十種を擧ぐ、今こゝにこれを詳述する餘裕なきゆゑ、たゞ所說より見て、これを大別すれば、宇宙萬有の生起に關する說、解脫に關する說、我に關する說の三種に區別せらるべき乎。もとより細かに見れば此等三種の意を含むものもあれば、また兩義に亘るものもあり、また此の三種以外の意を有するものも存せんも、大體より見てかく分類し得らるべし。

宇宙萬有の生起に關する說として見るべきものは、自在天、那羅延天、遍嚴等の神あつて世界を創造すと說くもの、或は地水火風空が世界生起の原因なり、或は萬有は時を原因となすもの、また萬有は自然に生起す等の說である。

また解脫に關するものは、瑜伽の我と建立の淨、不建立の無淨等にして、また此の身の內に、或は此身を離れて一種の我ありとなす我論に屬するものは、內我、人量、壽有、補特伽羅、識、阿賴耶、知者、見者、能執、所執、內知、外知、社怛梵、意生、儒童、常定生等なり、次に聲と非聲卽ち聲の常住說と無常說なるが、聲常住說は一種の我論とも見らるゝものなれども、無常說はその反對の義を述ぶるものなれば、我論のうちに屬すべからざるものである。而も佛法の正理より見れば偏無斷見の說なれば、所謂外道たるをまぬかれぬものである。

しかして本經には、此等所說は、我の自性を觀ぜざるより起る迷見なりと說かれ、疏にはその妄執を破釋し、弘法大師は十住心論に

三十の大外道は、各々に眞に迷て輪の如く轉ずといへり。

此の如く此等諸說は順理の敎へにあらざれば、かゝる敎へに依るものは、生死界に迷ふ大なる過患ありとし、善惡の理を知らず、一向惡業を行するものと同じく、淨心生起の因由とし、心續生の法門を說かんとして、最初に此等の迷見を示さる、弘法大師は此等三十種の外道、及び善惡の理を知らず、一向惡業を行するものを十住心の中には第一の住心として釋せらる。

七、八　心

妄我見を執するもの、及び善惡因果の理を知らず、惡業を行ずる第一住心の人、善心を生起しつひに如實に自心性を體するに至る、淨心生起の道程一準ならざるべきも、經に第一住心の人の淨心生起の相につき下の如き說あり。

一向惡業を行じ、物欲に耽著せるもの、飽滿なる生活の過患多きを知り、節食することの却つて身の安穩なるを感じ、節食せんとする念を生ずるが如きは、善心の種子の初めて生ずるものなりといへり、或は世に仁義慙愧等を以て善となし、これを行ずるものは人稱譽するより、自ら善をなすあり、或は世に種多の災禍起るよりして自ら善心を生起するものあり、また世の善知識の敎誘に依て善心生ずるものあり、或は善知識の勸導を俟たず、自ら自心本有の靈性に目醒めて、善心生起する等、その起因無量なるべきも、經には多食より諸の過患を起すを見て節食せんとの念を生ずるを、善心生起の種子なりとし、漸次にその善心の增長しゆく相を八心として開說せり、八心とは種子、芽、疱、葉、敷華、成果、受用種子、無畏心なり、卽ち種子心は節食または一日食せざるをいふ。かく己れに節せしものを、人に施す善念の生起を芽、疱、葉、敷華、成果の五心として明かせり。己れに節せしものを父母等の親戚に施與するを芽といひ、更に他人に施與するに至るを第三の疱種心といひ、他人のうちにも器量高德の人に與ふるを第四の

葉種心といひ、歡喜の念を以て人格高き人に與ふるを、第五の敬華心といひ、進んで親愛の念を以て人格者に供養するを第六の成果といふ、されば八心の中の第一の種子心は節食即ち克己にして、第二の芽種心より第六の成果までの五心に、一の施心の次第に增長する相を說けるものである。かく己れに節して人に施す善念生起の相を說かれたる種子心より第六の成果に至る六心を以て、弘法大師は十住心のうちには第二の住心、即ち人倫の道を說ける人乘なり、とせり。

次に第七の受用種子、第八無畏の二心は、これ人道を守るに至りし第二住心の人が、天神を信奉する世の淺近なる宗教心を生ずるに至りし相を說きしものである。即ち天上界に梵天、自在天乃至諸天諸神の存することを聞き、此等諸神に虔誠に歸命し、供養すれば、現世には諸の善利を得、未來天上の樂土に生じ得らるゝことを信じ、此等宗教の所說を奉修し、十善等の戒を持し、ある定を修し、また他主空三昧に依てある觀智を得る道を明す等を云ふ。上述の如く本經には天上に生することを敎ゆる外道の說を、第七受用種子、第八無畏心の二心として說かれたるを、本經の疏には第八無畏心より、殊勝、決定の二心を開き十心として釋せり。しかして此等八心または十心は、これ世間の善心の生起、また世間淺近なる宗教心の發動せる相にして、未だ眞實の解脫を說く佛敎に依れる淨心生起の相を明かせしものにあらず、而も疏にはかゝる外道の天神を崇信するもの、佛敎の深趣を聞いて第九殊勝心、第八無畏心、第一種子等より眞實の淨心を生起する次第を釋す。

弘法大師は、かゝる天神を信奉する敎を十住心中の第三の住心として說かる。それにつき上に三十種の外道の說を第一住心に屬すといひ、今また外道は第三住心なりと云ふは、先後相違に似たるやうなるも、外道を第一住心なりと云ふは、これ外道は萬有は神我の創造なりと說き、正因正果の理を撥無する妄見を立つる方面より見たるものにして、今第三の住心に屬するは、外道の敎も眞に信奉し、十善等の戒を持せば、世間殊勝の善根を成ずる義あるによる。此の如く外道の說も眞に信奉せば、天上の神の世界に生じ得らるゝことあるも、而もこれ究竟の解脫を說くものにあらざれば、たとひ天界に生ずとも、また因つきなば、地獄等の惡趣に墮することあり、經疏によれば、外道とは神を立てその神は常住にして眞實なれども、神より造られたる萬有は凡て虛妄にして非眞實なり、罪惡の世界なりとし、神と人とに間隔を立て、所謂二偏二見の邪計に墮し、神人一體、萬物同根の不二一如の秘旨を明し、人身に即して神性を體得する深理を說かざるものとせり。即ち經には外道の說を他主空三昧なりと說く、これ自身の外に神を立て、神のみ眞實在にして、他は幻化假妄の非眞實なりとの敎意にして、多くの世間の神を立つる宗敎は、このうちに攝せらる。また經には此等の說は斷常の二邊を帶びたる邪計なりとせり。しかして佛敎は因緣の有を說くが故に斷空の邪見を離れ、諸法の無自性を明すが故に常有の見を離れ、有空を一如に見、止觀双修し、悲智双運、無我にして大慈悲の行を全うし、斷常空有を離れたる眞實の無上菩提を成ずる道を說く。

八、六十心

上述の如く違理の迷見に囚らはれ眞理に違背するもの、及び一向惡業を行する第一住心の人、人倫を守り、神を信ずる宗敎心を生ずるに至りしは、これ世間の善心の種子漸く出生せるものなるが、嘉苗を生育せしむるには、つとめて穢草を除かざるべからざるが如く、世間の善心をして漸次增長せしめ、つひに如實に自心の大菩提を體得するに至

らしめんには、この善心と俱起する妄心を除かざるべからず、この妄心種多あるべきも、經に六十の妄心を說けり、今その名相を列記せば

貪心　惡法に隨順するを云ふ。無貪心　善法を進求せざるの心、瞋心。慈心　偏愛より起る小慈。癡心。智心分別の世智なり、道人の法は分別智の籌量の能く及ぶところにあらず、故に修道の人、世智辨聰を嫌ふ。決定心　無慧の決定心。疑心。闇心　法門に於て疑惑を生じ、種々憶度するの心。明心　中正を得ざるの偏智。積聚心　一法を學習し、種々殊異の法を一法と同なりと見んとするを云ふ。鬪心　他の說に對して是非を論ずるを云ふ。諍心　自己の所念所作の事に於て、是非取捨の念息むなきを云ふ。無諍心　是非共に捨て正法に住することを得ざる怯弱の心。天心　世間の事意の如くならんことをのみ希願し、廣大なる佛果を求めざるの心、阿修羅心　世間の快樂に耽著するの心。龍心　世間の廣大なる資財を貪り出世間の淨心を障へるの心。人心　世間の紛紜の事を思慮し、法利を求めざるの心。女心　欲法に隨順するの心。自在心　自在天神の如く世間に自在を得んことを念願するの心。商人心　內外の學を兼習するを云ふ、廣く法門を學ぶは嫌ふべきことにあらざれども、たゞ利用の爲にのみ學ぶを戒むるなり。農夫心　廣く法門を聞き後に修せんとするの心、法は聞くに隨うて行ずべきものなるが故に、之を嫌ふ。河心　心一境に專らならず、行常なきを云ふ。陂池心　名利等を求め厭足なきを云ふ。井心　其心深隱にして、共住の人にも其心事を知らしめざらんとするを云ふ。守護心　自己の身心を守護するを念じ、他を顧みざるもの。慳心。狸心　法を聞くも卽時に行ぜず、また恩德を念ぜざるを云ふ。狗心　少分の善法を聞て喜足を生じ、餘の勝事を樂はざるの心。迦樓羅心　朋黨に依て事をなし、獨行すること能はざるを云ふ。鼠心　離間語をなし、或は他人の事業を破壞するを云ふ。歌詠心　自心內に實證せざる法を、文句を莊嚴し、美妙の音を以て人の爲めに開演するを云ふ。舞心　小神通を得、不思議の事を現ぜんとするを云ふ。擊鼓心　たゞ辨才を習ひ他人に法を說かんとするを云ふ。室宅心　自身のみを防護するの心にして上の守護心に似たり。師子心　一切事に於て一切の人に勝れんとするを云ふ。鴞鴟心　日中なすところなく、却つて夜に入つて作爲あるを云ふ。烏心　事に疑怪驚怖するを云ふ。羅刹心　善事を破壞するの心。刺心　善惡の事をなし後に追悔の念を生じ、常に動慮不安なるを云ふ。窟心　長壽を得んが爲めに仙界に入らんとするを云ふ。風心　散亂不住、一行に專らならざるを云ふ。水心　正邪の別執を持し、却て淨心を障礙するを云ふ。火心　一切の所作初め猛利にして終りなきを云ふ。泥心　目前のことがらも分別し記憶し得ざるを云ふ。顯色心　識見なく善惡のことに轉ずるを云ふ。板心　心小狹にして廣大の意樂なきを云ふ。迷心　狂迷の心。毒藥心　行爲に方規なきを云ふ。羂索心　因果撥無の斷見に縛せらるゝを云ふ。械心　禪定を偏修するを云ふ。雲心　憂喜間雜の心。田心　心の修養を念せず、身の資養と、飾裝にのみつとむるもの。鹽心　分別の念を次第に增すを云ふ。剃刀心　出家の相に住するを至善と思ひ、心の無明を除かざるもの。彌盧等心　高慢なるを云ふ。海等心　一切の勝事皆己に歸し、餘人をして比するものなからしめんとするの念。穴等心　發心の始め戒行を具足して持するも、後に守持せざるもの。受生心事の善惡を擇ばずして行ずるもの。猿猴心　散亂躁動なるを云ふ。

以上の六十心、人に依て何れか偏多なるあり、或は一時に雜起することあり、また次第に生ずることあり、人もし一切時に自省し、以上の妄心生起するとき、これを簡去するときは、自然に淨菩提心に順ずることを得。本經の疏には六十心一々の名義とその對治の道とを釋す。求道の士は開いて見るべし。

九、三　劫

イ

本經に七軸三十六品あるも、第一の住心品は一經の正宗を說くものなるが、その住心品中にも、上述の三句及び今正さに解せんとする三劫の法門はその主要なるものである。即ち九句の中、最初に心續生の答說として八心、三劫を說かれたるより見るも、また弘法大師がこの三劫の法門に依て、かの十住心の法門を開演せられたるより見るも、三劫の法門の甚要なることの一端を想見せらるゝであらう。

三劫の法門はその說相より見れば、小乘敎より三乘敎、三乘敎より一乘敎、更に顯敎の一乘敎より秘密眞言乘に轉入する經路を明すものにして、多く一般佛敎卽ち顯敎の敎意を說かれたるものである。大日如來が密敎のうちに、何故にかゝる顯敎の敎義を說かれたるやにつき、相傳の說に依れば、最初より秘密眞言乘に歸依し、曼荼羅の諸佛を本尊とし、その本尊の三密門を修する眞言行者、佛を心外に觀じ、更に唯心觀に住して佛を念じ、つひに內外主客の分別の念を絕し、淨信に住し、阿字の大空位に悟入し、法身大覺の果體に契合する信念向上の狀相は、甚だ微細にして說示し難きより、客觀、主觀、絕對と漸次に法性の妙趣を開說する一般佛敎の說に對比し、以て眞言行者の信念向上の歷程を明かさんとして、かく顯敎の小乘、三乘、一乘の敎意を說かれたるものなりと云ふ。されば三劫の說相より見れば、多く顯敎を說かれたるも、如來が密敎中にかゝる顯敎を說き給ふ本旨は、眞言行者の菩提心の轉昇を明かすにありと知るべきである。かゝる見地よりせば八心、三劫は九句の中の心續生の答說なりと云ふべきである。もつとも本經の疏には三劫の法門をば九句の中の心相（妄心）の答說なりといへり、三劫は三妄執なれば、所謂心相（妄心）の答說なるべきも、三劫を心相の答說と云ふは、三劫に妄心を能く超越し斷除する淨心と、この淨心に超度せらるゝ妄心とあり、その所超所斷の妄心より見て、三劫を心相の答說と釋せられたるか、而も能超の淨心よりいへば八心三劫は心續生の答說なりと云ふべきである。なほ三劫段には、九句の中の異熟識及び時の答說あり、しかれば三劫段には、九句の中の心續生、心相、異熟識、及び時の答說あるも、正しくは心續生の答說にして、他は兼意なりと見るべきである。心相等を兼意なりと云ふは、心相の正答は六十心なり、また異熟識、及び時の答說は、本經の疏、其他弘法大師の釋等に、その屬當分明にこれなし、而も異熟識は第二劫の觀察蘊阿賴耶の句に於て之を見るべく、また時の答說は三劫の劫は梵語の劫跛 kalpa の略語にして、劫跛には時間の義あるより、一般佛敎には發心してより佛果に至る修行の期間を三大阿僧祇劫 asaṁkhyeyakalpa とす、今本經の三劫も、三阿僧祇劫と同義に解し、劫を時間の義と見れば、今の三劫は、九句の中の、時の答說なりといひ得らる。而も密敎には三劫の劫をば、時間の義に解せずして、分別の意義に翻じ、三劫をば三つの妄分別と見るゆゑ、一念一時の間にも、この三妄執を斷盡して成佛し得るのである。かく劫跛に時間及び分別等の義あるも、今は妄分別の義を表とするゆゑ、三劫は時の答說なりとの說は兼意なりと知るべし。されば上述の如く三劫の法門は、正しくは淨菩提心の轉昇卽ち淨心生起の次第たる心續生の義を明すものにして、兼ねて淨心に斷ぜらるゝ妄心の心相、及び修行の間に經る時間、其他異熟識等の義を說かれたるものと知るべし。

前敍の如く三劫段には多く顯敎を說かれたるが、この三劫段所說の顯敎をば、所寄齊の顯敎とも云ふ、所寄齊とは

比較し對明せらるゝの義である。即ち如來が密教のうちに顯教を說かれたるは、これ密教の理趣を一般佛教の教理に對比して明かさんが爲めである。故に所對明の爲めに說かれたる一般佛教を所寄齊の顯教といひ、これに對して能對明の主體たる密教をば、能寄齊とも云ふ。本經の疏に

今廣く三劫、六無畏處の衆多の心相を明す所以は、皆是れ外迹に擬儀して、以て修證の深淺を明す云云

といへり。即ち三劫段に顯教を說くは此等の說に擬して以て、眞言行者の修證の淺深次第を示すものなりとの意である。されば古來、三劫の法門は正しくは眞言行者の菩提心の轉昇の相を明かし、兼ねては最初顯教を修するものが、菩提心の勢力と、如來の加持力に依り、顯教の無相觀より起て、秘密の曼荼羅界に轉入する所謂迂回の機根の修行入證の次第を開說せられたるものなりとも云ふ。

四

上に三劫の法門とは、眞言行者如來の三摩地に住し、三密の法門を修するとき、その信念轉昇の相、微妙にして、知り難ければ、顯教の教義に對明し以て信念轉昇の相を開說せられたるものなること、隨て三劫段には多く所寄齊の顯教を說くも、その正旨は能寄齊の眞言行者の菩提心の轉昇の相を明すにあることを述べたり。以下三劫の法門即ち所寄齊、能寄齊の要綱を釋せんに、三劫とは其の所超の妄心よりいへば、これ衆生本有の淨菩提心の光りを覆障する迷妄たる無明煩惱である。無明煩惱の體これ一なるも三劫と云ふは、たとへば、一の暗相もその暗を照破する燈光の强弱に依り、暗相にも自ら差別を生ずるが如く、無明の迷暗を照破する菩提心の光の顯現の次第に依て、無明煩惱にも種多の差別を生ずるに至るのである。淨菩提心の光り僅かにその淨光を發せしとき除かるゝ麁なる煩惱を初劫といひ、菩提心の光りの更に一轉の開明をなすに至るとき除かるゝ微細なる妄執をば第二劫といひ、その菩提心大惠の光明を發して、普ねく法界を照らすとき、除滅せらるゝ微細なる迷暗を極細妄執と云ふ。されば常に三劫をば、麁、細、極細の三妄執と云ふ。即ち初劫をば麁妄執といひ、第二劫をば細妄執といひ、第三劫を極細妄執と云ふ。

その初劫の麁妄執を人執品の惑とも云ふ。人執品の惑とは所謂人我執にして、身心のうちに常に變らざる一の主體の存在すとなす迷見である。佛教にては人身は色受想行識の五蘊の體が聚集し和合せし因緣に依て成ぜしものなるゆゑ、人身には常に變らざる堅實なる我體なき、人無我の理を明す。この人空無我の觀智の光りに依て、人我の妄執を除くを初劫の法門となす。かゝる初劫の法門は、これ小乘佛教の所說にして弘法大師の十住心よりいへば、これ第四の住心の教へである。即ち小乘佛教にては人空無我の理を觀じ、人我執の迷妄を破り、世間因果の制約を離れ、寂滅の涅槃 nirvana に住する道を說くものである。こは所謂初劫に於ける所寄齊の說であるが、密教の中にかゝる人空無我の顯教の理を明すは、これ能寄齊の眞言行者の淨菩提心の相を示さんが爲めである。即ち眞言行者本尊の三密を修し、身心統一し、三昧に住するとき、往々不思議の靈相を感見することがある。かゝる靈相を感ずるに至れば、感激してその靈相に心捕はるゝことがある、もしかゝる感應の事實に心捕はれ、この事實に卽して、この事實を超越することが出來なかつたならば、如來大覺の境に入り、自心の眞性を如實に體得することが出來ないのである。故に本尊を信念し、その本尊との感應加持に依り、ある靈相を感見することあるときは、この感應の事實に卽してこれを超越する工夫が大切なのである。その工夫とは初劫に明す人空無我の觀である。即ちある靈感を得ることありとも、こは本尊と行者との感應の因緣に依て感見せしものにして無相無性なりと觀じ、その靈相に心執滯せず、そを超度するに

至る、これ眞言行者初劫の麁妄執を斷じたる位にして、かの顯教を學修する人、人空觀に依て人我の妄執を斷じたる位と分齊を同ふせるものである。

かくいへばたゞ空三昧に住し、感應の事實を否定し、本尊の念誦をも止息すべきを敎ふるものゝやう聞こふるもしからず、無執無念にして本尊を念ずべきを明かすのである。已を空うして本尊を信念すべき道を說くのである。かく無執無念にして本尊を念ずるところに如來眞實の世界に入ることが出來るのである。

次に第二劫の細妄執とは法執品の惑とも云ふ。この法執の斷不が小乘と大乘の分かるゝ所以なりとも見らるゝ。その法執の惑とは、初劫にては五蘊より成れる人體は無我なるも、而も五蘊の體は三世に亙つて常恒實有なりと說く、その五蘊の體を實有と見るを法執の惑とも法我とも云ふ。この五蘊の體は現象界を構成せる自性である。小乘にては此の世界成立の自性である五蘊の體を實有と執するより、引いて此の世界即ち生死界の存在を實有なりと見る、この生死界を實有と見るよりして、この生死界に大怖畏を生じ、人生は無常、苦、無我なり等と觀じ、他を顧るの餘裕なく、自調自度早く涅槃に入らんとするのである。しかるに大乘には五蘊の體も衆因緣所生にして空なる理を明す。即ち人我も空なり法我も空なる人法二空の理を說き、この二空觀智の光りに依て、法執を除くを第二劫の法門となす。

此の如く法空の理を觀じて法執を破るところに、大乘佛敎の敎理の基本が存するのである。即ち五蘊の體、所謂生死界の實體も本來空なりと見るが故に、生死界に怖畏を生せず、還て生死界に住し、一切衆生を救濟せんとの大心を生じ、菩薩大慈悲の行業を成ずるに至るのである。

蓋し大乘にて人法二空と云ふも、此の有の世界の外に別に空の世界のあることを說くのではない。この有の世界の

一一が皆これ衆因緣に依て生ぜしものなれば、生ぜし物それ自身に堅實常住の我性あるにあらず、生々たる緣起の當體そのまゝ無自性空なる玄旨を說くのである。即ち因果の自體を深く究むれば、一一皆これ因果の制約を離れ、自在無碍、無相平等の涅槃の體なる旨を明すものである。この有の世界と空の世界を一に見るところに、大乘佛敎の本精神があるのである。所謂有と空、止と觀、無我と慈悲、此等の命題は大乘佛敎の中心觀念である。即ち無自性の理を觀じ、心を無我平等の境に住せしめ、因果のうちに居ながら、超然因果の制約を離れ、生死を解脫するを止といひ、而も因果差別の世界の狀相を見るを觀と云ふ。止に依て法の無我性を觀じ、己を空うして法界平等の心に住することを得るが故に、差別の世界に於て一視同仁、無緣の大慈を全うする菩薩大心の行業が成ぜらるゝのである。

以上は廣く一般大乘の敎意を概述せしものなるが、三劫の中の第二劫の法門は、これ所謂權大乘にして、未だ大乘の甚要を究盡して說くものにあらず、弘法大師は第二劫に於て第六住心と第七の住心等を開說せらる、第六の住心とはこれ法相宗にして、第七の住心とは三論宗である。即ち第二劫には、萬有は心より生ずると云ふ唯心緣起說と、またこの唯心の自體も畢竟空なりと說く三論宗の義とが合說せられてある。

元來佛敎は世界の解釋については、天地創造の神があつて、世界を創造せしものなりと說かずして、萬有は皆衆因緣に依て生起せしものなりとの因緣生の理趣を明すものである。隨て小乘佛敎にても因緣の義については六因四緣等の微細なる說がある。而も小乘にては唯心緣起の義を明かさゞるゆゑ、因緣所生の義は因緣生有自性の說となり、五蘊の自體の實有を認むるに至つた。しかるに大乘は萬法唯心の理を明かし、唯心の上に因緣生の義を立するゆゑ、萬有は鏡面に現ぜし影像の如く、性相共に無自性空なりとの人法二空說が立するに至つたのである。即ち有爲の第八阿賴

耶識 ālayavijñāna を本として、因緣生の義を明すものは第六住心にして、萬有は唯心の所生なりと云ふも、その心の自體は堅實常住なるものにあらずして、心の自性も無自性空なる理趣を開演するものは第七住心である。かく第二劫の法門のうちには、萬法唯心緣起說とその心の自體も空なりと說く二つの教意が合說せられてある。以上は第二劫の經文の說相である、所謂所寄齊の顯教である。如來が密教のうちにかゝる顯教の教理を說き給ふは、これかゝる顯教の說に對比し以て、眞言行者の菩提心の狀相を明さんが爲めである。

眞言行者如來の三密門を修するとき、種々不思議の境界を感見することあるも、無相空なりと觀じて、その不思議の境に愛執せざる旨を明かすものは初劫にして、第二劫には如來の境界は唯心の所變なりと觀ずるのみならず、その唯心の自體も無自性空なりと觀ずるものである。卽ち初劫は心外に本尊を見て、而もその本尊に愛執せざる義を明すものにして、第二劫は唯心觀に住して如來を念じ、而も唯心の自體にも執せず、無執無念にして如來を念ずべき旨を說くものである。

第三劫を極細妄執とも無明品の惑とも云ふ。第二劫にて一切法は唯心の所變なる理を觀じ、その自心の體も自性空なりと悟る無我觀智の光りに依て、法我執の煩惱除かれたるも、なほこの觀智と共なる微細の煩惱あり、この煩惱を極細妄執とも無明品の惑とも云ふ。この第三劫の惑を斷じて眞に佛智見を開顯する道を明すものは第三劫の法門である。

しかれば第二劫にて得たる覺智と共なる微細なる無明品とは如何なるものなりやと云ふに、第二劫にて萬法唯心の理を明かすも、第二劫の唯心義は有爲（現象界）の八識を本として說くものなるゆゑ、心は萬法能生の本にして、萬法は心より生じたる末法なり、卽ち心と萬法とに能生所生、本末の微細なる不同を見るものである、また第二劫は有爲の第八阿賴耶識の緣起を說き、眞如（本體）が開發して萬法を成ずる眞如緣起の理を明かさゞるゆゑ、眞如と萬法とに隔歷の見を存するものである、此の如く一心と萬法とに能所本末を見、眞如と萬法とに隔歷ありとする分別の見を無明品の惑となす。もつとも第二劫のうち第七の住心にては有爲の萬有卽空の理を明かし、有空一際、有爲無爲一如の玄趣を說かざるにはあらざれども、畢竟は有より空に歸入せんとするものである。此の如く一心と萬法とに能所の差別あり、眞如と萬法とに隔歷あり、或は有より空に歸せんとする取捨の細念を第三劫の無明品の惑となす。

しかして第三劫には眞如（絕對一心）より萬有の開發する義を明かし、眞如卽萬法、萬法卽眞如、所謂本體卽現象、現象卽本體の妙旨を顯示す。かゝる體相一如の深趣を觀ずることに依て、極細妄執たる無明品の惑が消融せらるゝのである。しかるに弘法大師の十住心に依れば、第三劫に第八、九、十の三種の住心の教義存す。かゝる見地よりせば、第八九の二ケの住心は共に眞如緣起の理を開說し、有爲無爲の別執たる無明品の龕分の惑を斷ずるも、なほ無明品の細分の惑を帶するものである。その第八九住心の帶する無明品の細惑をこゝに詳悉することを得ざれども、その大要を釋せば、第八九の住心共に眞如緣起の妙趣を談じ、萬法卽眞如法性なりと云ふも、而も萬有はこれ眞妄和合の生起なり、妄法有力に依て現起せしものなり、畢竟は眞如の妄的發現なりと見、緣起の現象より眞如の本性に歸入せんとする傾向あるを免かれず、かく一を捨て一を取らんとする細なる分別の念を無明品の細分の惑となす。

以上は弘法大師の十住心の教意に依り、その要旨を述べたるものなるが、なほ本經の疏に依れば、第二劫に屬する第七住心にては、一切皆空の理を宣示し、第三劫の第八住心にては、この空は頑靈無知の單空にあらず、空の體に法

界を遍ねく照らす光りあり、この寂にして照、即ち寂光不二の一心の自體と、萬法との不二一如の理を明かし、この寂光の一心に證入すべき要道を說くものである。かゝる寂光の一心に證入するはこれ顯教にては、至極の佛果なれども、高き眞言門より見れば、なほ一心の實體に執滯せるもの、所謂無相の一心に沈空滯寂せるものにして、これ眞の大覺位にあらざれば、かゝる境地に住せる人に對して、如來警覺開示して、更に向上の一路あるを指示し給ふ。本經の疏に、その警覺開示の相を明かして、

行者初めて空性を觀ずる時、一切の法皆な心の實際に入ると覺る、下も衆生として度すべきを見ず、上み諸佛として求むべきを見ず、爾の時に萬行休息して、究竟を爲すと謂へり、若し此に住するときは卽ち退て二乘地に墮せず、進んで菩薩地に上ることを得ず、名て法愛生と爲し、亦無記心と名く、然も菩提心の勢力と及び如來の加持力とを以て、復た能く悲願を發起す。爾の時に十方の諸佛同時に現前して、之を勸喩し給ふ。佛の教授を蒙るを以ての故に、轉じて極無自性心を生ず、乃至心の實際も亦不可得なり云々

即ち寂照不二の一心の自體もなほこれ不可得無相と觀じて、一心の自體にも住せざるを第九の住心となす。第八住心は一心なる實體に執滯せる境なるが、かゝる實體觀念の捕はれより離れ、眞の無所住に住するとき、あらゆる分別の細念を絕し、無明品の細惑たる根本無明が除かるゝのである。かくの如くあらゆる分別の妄執を離れ、無分別智に住するとき、毗盧遮那の心佛現前し、正等覺顯現す、かく無分別智に住し、業生の生を離れて、如來常住の生を得、毗盧遮那大覺の境に住するに至る、これ第十秘密莊嚴心の位にして、秘密曼荼羅の世界に入れるものである。初地の佛果に契合せるものである。

上述の如く三劫の說相は初劫に人執の惑を斷じ、第二劫に法執を斷じ、第三劫に入り寂照の一心に住するとき、諸佛の警覺開示に依り、つひに秘密莊嚴心に轉入する義を明すものにして、これ顯教より密教に入る次第、所謂從顯入密の迂回の行者の進修の相を明すものである。しかして三劫の說相は迂回の機の趣入の次第を明すものなれども、その三劫の教法の本旨は、最初より第十住心に住し、三密の法門を修する能寄齊の眞言行者の信念向上の狀相を說けるものなることは前敍の如し、本經の疏に曰く、

餘教の中の菩薩の如きは、方便對治の道を行して、次第に漸く心垢を除き、無量阿僧祇劫を經て、或は菩提に至ることを得るあり、或は至らざる者あり、今此の教の諸の菩薩は則ち是の如くにあらず、直きに眞言を以て乘と爲して、淨菩提心門に超入す。若し此の心明道を見る時には、諸の菩薩の無數劫の中に修する所の、福慧自然に具足す。譬は人有て舟車を以て跋涉し、險難惡道を經て、五百由旬に達することを得、更に一人有て直きに神通に乘じて、空を飛て度す、其の經過する所、及び至到の處、則ち異なること無しと雖ども、而も所乘の法に殊なり有るが如し。又世尊先きに廣く如上の諸の心相を說き給ふは、眞言門の諸の觀行人をして、若し是の如くの境界に行至せん時、則ち須らく明かに識て、未到を到と謂て、中路に於て稽留することを得ざらしめんが爲め也云々

即ち大日如來が、密教のうちに顯教を說き給ふは、これ神通の寶輅たる如來の三密門を修する、眞言行者の進趣の相、速疾深密にして、これを六度止觀の舟車に乘じて去る顯乘所修の人の趣入の相に對明せずば、示し難きと、また未得を得とし、未到を到とするものあらんことを恐れ、顯教に寄齊して、眞言行者の住心を示し給ひしものである。

即ち眞言行者如來の三密門を修し、心外に如來の境界を見ることあるも、無相無性と觀じ、愛執の念を生ぜざるは

初劫にして、また唯心觀に住して、如來を念ずるは第二劫、進んで心内心外、主客分別の細念を絶し、無分別智に住するは、第三劫の第八九の住心の人、空性の一心も不可得なりと觀ずる位と分齊を等うするものにして、無分別に住するとき、煩惱業に依て得たる生死の生を離れ、如來常住の生を得て、我即大日の自覺を成じ、衆生を成就し、佛國を莊嚴し、慈悲の佛業を成ずるに至るは、第十住心の位である。

なほ顯乘の六度の行を舟車に比し、密教の三密行は神通の寶輅なりといへば、顯密二教は、その所修の行體異なるのみにして、所證の理、所詣の佛果は同一なるものゝ如く思惟せらるゝも、密教よりいへば、顯密二教の所證の理に同異の二面を說くものである。即ち無分別智に住し無相の理に契合するは一なるも、無分別智に住するとき、大日如來の大覺の體に同じ、心内無盡の萬德を開顯するは、唯密教のみに說くところである。本經の疏に曰く

復次に輪王の太子の初めて誕育する時、衆相備足して缺減する所なし、未だ能く遍く衆藝を習ひ、四洲を統御せずといへども、然れども已に能く七寶を任持し、聖王の家業を成就す。何を以ての故に、即ち是れ輪王の具體なるを以ての故に、眞言行者の初めて淨菩提心に入るも、亦復是の如し、未だ無數阿僧祇劫に於て、具さに普賢の衆行を修し、大悲の方便を滿足せずと雖ども、然も此等の如來の功德皆已に成就す、何を以ての故に即ち是れ毗盧遮那の具體法身なるが故に云々

即ち輪王の太子は生れながらにして、王位を繼承し、四海を統御する德あるは、これ輪王の系統のうちにあるがゆゑである。我等衆生も如來の覺位を成じ、現身に佛德を體得せらるべきは、これ一切衆生は大日如來の自覺の光りに照らされ、如來の大覺に連らなり曼荼羅の系統のうちにあるがゆゑである。されば吾等は發心して、眞に如來に歸命すれば、三劫の妄執を一念に超度し、如來金剛の身に同じ、佛眞子として更生し、法界に自在を得、佛業を成ずることまた難きにあらず。

八

上段所述の如く九句の答說中に、第一に答せられしは、心續生の義である。その心續生の答說とは先敍の八心と三劫の法門である。八心三劫の要旨は先きに一應述べたるも、而も八心、六十心、三劫と次第し、八心と三劫との間に六十心の釋ありしため、八心と三劫とを心續生の一法門として、述ぶることを得ざりしゆゑ、今八心三劫を總合して解せんに、八心とは、たゞ物欲に耽り、惡業を行ずる人、忽然として善心を生じ、人倫を守り、更に天神を信奉するに至る淨心生起の相を明かせるものである。即ち八心中の第七受用種子　第八無畏の二心には、神を信奉する世の多くの宗教を攝すべければ、これを概說し得ざるものあるも、これを後の三劫に對して、その特質を擧ぐれば、神我を立つる點に存す。而して後の三劫これまた概論し得ざるも、無我の義を明かし、神我を否定するが如きは、その敎の特質の一なり。即ちかりに世界解釋についていへば、一は世界は神我の創造なりといふに對して、一は萬有は衆因緣に依つて生起するものにして無主無我なりと說くの相違あり。上述の如く一向行惡業の人、善心を生じ、つひに心外の神を信じ、更に無主無我の理を觀ずるに至るは、これ深く自心佛を體せんとするに至る道程にして、淨心續生の自然の經路なるか。而して初劫にては宇宙創造の神我の實在を否定するのみならず、人身はこれ五蘊和合の體にして、常一主宰の我體なき所謂人無我の空理を明す。この無我の理を知らず、妄りに我執を起し、業を造り、この煩惱業の力に依つて此所に死し、彼處に生じ、一類の五蘊相續轉生止むことなきは、迷界の實狀なりとし、人無我の理を觀

し、煩惱業を斷絶し、五蘊卽ち身心の相續を斷滅し、身心兩つながら空寂に歸せる無餘涅槃に入るを初劫の教意となすものである。しかるに第二劫に至れば、初劫にて究竟の解脫地となす無餘涅槃より起つて、大乘の大涅槃に向ふ所謂回心向大の義を明す。小乘にて身心兩つながら永劫に空寂に歸せるとなす涅槃は、これ身心眞に空滅に歸せるにあらず、たゞ三昧の定味に醉へるものなりとし、この寂滅の涅槃より起つて大乘の大涅槃に向ふ回心向大の義は、これまた心續生の道程に於ける淨心開展の大なる轉機である。

しかるに第二劫の中、法相宗の如きは個別性の體たる阿賴耶識を立て、この識は有爲法なるが故に、生滅するも、相續不斷、如何なる時にも斷滅することなく、假令佛果に至るも、大圓鏡智と轉變し、如來眞實の功德を依持し、永劫に滅盡することなき義を說く、更に第七住心に至れば、因緣の當體卽空の玄旨を明し、有空不二の故に、因緣の卽空を觀じて、生死に住せず、緣起の差相を見て涅槃に住せず、大慈悲の菩薩行を全うすべきを開演す。

その第三劫の眞如緣起を說く住心よりいへば、生滅の識相をして不生不滅の眞心に歸入せしむるを以て解脫となすものである。卽ち百川の流れ海洋に入り、同一の鹹味となるが如く、個別を普遍絶對に沒入するを說くものである。而して弘法大師の教意よりいへば、小乘にて身心兩つながら空滅に歸するを究竟といひ、或は大乘にて個別性を絶對眞如に歸入するを眞解脫なりと說くが如きは、共にこれ個別性の否定を主とする教にして、此等は遮情教とて、衆生の分別の妄執を打破するを本とし、未だ如來眞實の大覺の境地を明かさゞるものなり。されば身心兩つながら寂滅に歸する無餘涅槃に入れるとき、また生滅の心識をして眞如一心に歸入するとき、菩提心の勢力と、如來の警覺に依り、その當位の眞實にあらざるを知り、後際に進趣するのである。卽ち眞如一心の自體も、眞實の所住の地にあらず、不可得、無自性と觀ずるとき、一切分別の細念消融し、毘盧遮那の心佛顯現し、無上の究竟覺を成ずるのである。この境地は一切が大日如來の自證大覺の法界三昧に住すると共に、各々が如來常住の生を得、各々の本誓三昧を顯現しつゝある秘密曼荼羅の世界である。

この眞實究竟の大覺位たる、法身如來の果體をば、一般佛教卽ち顯教にては、無相一味の非人格の理體なりと說くも、密教にては大智大悲圓滿具足せる大自在の人なりとす。弘法大師は一般佛教の經論のうちに、法身は無相なり、空なり、無我なり、不可得不可說にして、衆生攝取の靈用もなき非人格の理體なりと云ふは、これ分別の妄念を未だ離れず、隨つて法身絶對の體を眞に體得せざる因人に對しての說である、卽ち相對分別の境を離れざるものに對しては、絶對法身の境地は、たゞこれを否定的に示すより外なきゆゑ、法身は無相なり空なり等と云ふ、しかるに密教には法身佛に說法あり、衆生攝取の靈用あり、無碍自在毘盧遮那具體の人なりと說くは、これ法身の體を如實に體得せる果人の爲めに、法身の果境の眞際を開說せられたるものなりといへり。この法身大日如來の自證成佛の果體より、一切衆生を攝取せんが爲めに、十方世界に無量の加持身を示現し給ふ。而して本經に明す八心三劫の心續生の法門とは、衆生此の法身示現の加持身に歸命し、その尊の三密門を修し、つひに法身大日の大覺の體に契ふ信念向上の相を明かせるものである。前敍の如く八心三劫の文相より見れば、多く顯教の義を說かれたるものなるも、三劫の法門所說の本旨よりいへば、眞言行者の菩提心の轉昇の相を開示せるものである。

十、十　地

上

本經には三劫の法門の次に十地の說がある。この十地には種多の義あるも、今經の文相より見たる淺略の釋と、その深秘の意を一應述べようと思ふ。その文相より見れば、八心、三劫、十地は相貫通せる法門にして、八心は一向行惡業の人、善心を生じ、道德を遵守し、遂ひに天神を尊信するに至る淨心生起の相を明かし、三劫は神我の迷執を破ぶる無我空義の淺深の次第を說かれたるものなることは前段所述の如し。

その第三劫に於て一心の本性も不可得空なりと悟了し、一心にも執滯せざる時、主客の細念たる極細妄執をも斷盡し、眞に虛空無垢の大覺の體に契合するは第三劫の究竟位にして又十地の最初たる初地歡喜地である。三劫を經て十地に歸する旨を明すより常に三劫は十地の前に建つる法門なりと云ふも、こは其大綱論である。細かに見れば第三劫に遮情と表德との兩意あり、主客の細念を絕する遮情の邊は第三劫の當分にして、この主客の細念を絕すると共に毘盧遮那如來の大覺の體に契合し無盡の萬德を開見し、我身卽佛の自覺を成ずる表德の位は、これ十地最初の初地である。

しかして毘盧遮那大覺の體に契合し、遍法界の自心性を體得し、一切世界の衆生を悉く度し盡くさんとの大願力を生ずるに至る十地の初位たる歡喜地を、かの三句に配すれば、これ菩提心爲因の位である。化他大慈悲の萬行に依り、大願力をして堅固ならしむるは、第二地以後第七地に至る位にして、これ三句の中、大悲爲根に配すべきである。常途佛敎の說に依れば、第八地以上は任運無功用、卽ち無意識にして、淨心の轉起する旨を明すより、本經には第八、九、

十の三地をば方便爲究竟の義に配す。しかして本經には更に方便爲究竟を開いて上々方便の一位を立て、十地を越えたる第十一地の上々方便位を最極究竟の佛果の體なりとす。

下

以上は本經の文の上に顯れたる淺略釋の一端なるが、本經の疏には、本經に說ける十地には淺略、深秘の兩意あるも、その本旨は寧ろ深秘釋のうちに存することを述べて曰く

此經宗には、初地より卽ち金剛寶藏に入ることを得るが故に、華嚴の十地經の一々の名言、阿闍梨の所傳に依らば、皆須らく二種の釋を作すべし。一には淺略の釋、二には深秘の釋なり。若し是の如くの密號に達せずして、但だ文に依て之を說かば、則ち因緣の事相、十住品(十地品)に往き涉る。若し金剛頂の十六大菩薩生を解せば、自ら當さに證知すべし。

しかしてその十地の深秘釋なるものに種多の義あるも、その主なる點を擧ぐれば

一、本經の釋文より見れば、十地の前に三劫、六無畏あり、十地の後に第十一地の佛果を立つるも、その深秘釋よりいへば、眞言門の行者の位階は十地にて盡くす。卽ち地前の三劫、六無畏は初地に攝し、また第十一地の佛果をば十地の最後位たる第十法雲地に該攝す。

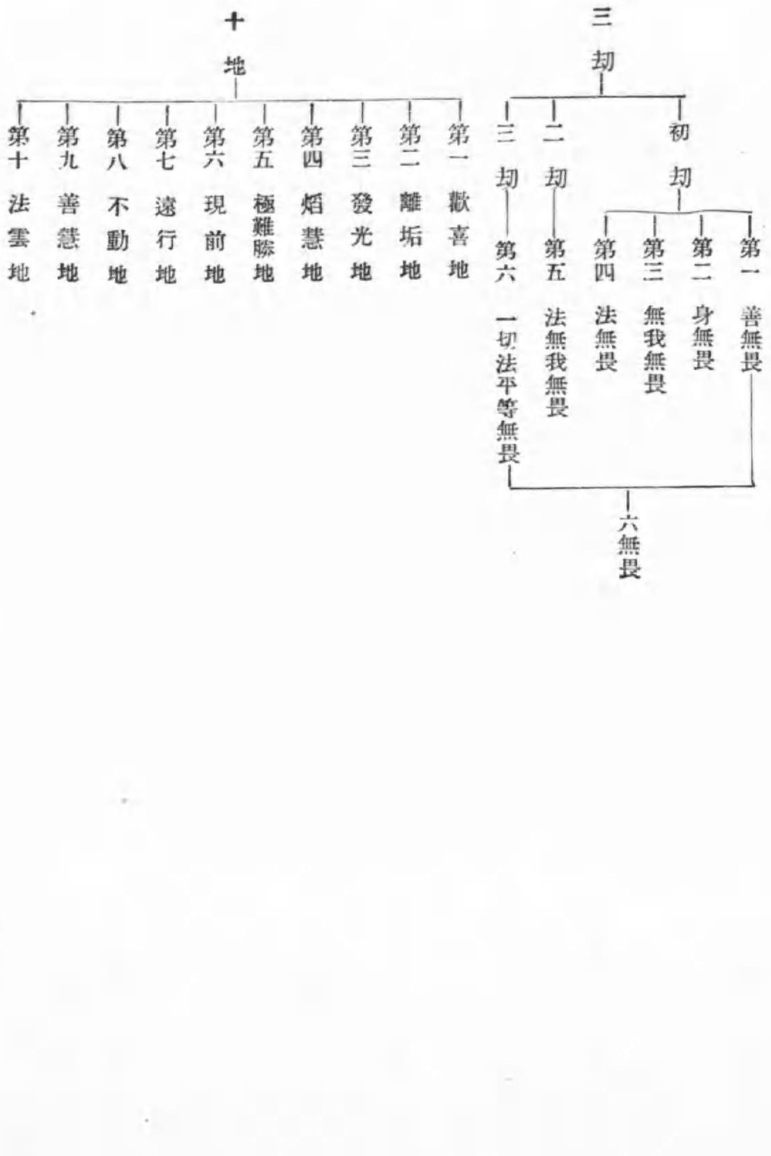
二、十地の最初の歡喜地の一位に、自證の成佛圓滿すること、及び第一地より第十地に至る各々の地位は、次第淺深あるにあらず、同じく一功德を表現せるものなること。

三、十地はこれ菩薩因位の境なるも、この因位に佛果を攝し、十地の外に佛果を立てざること。

以上の教意を約述せんに、凡そ十地とは一般佛教の説よりいへば、これ菩薩が修行して佛果に至る行位中の最上級である、即ち十信、十住、十行、十回向の四十位の修行に依り、眞實智を發こし、法性の體を體得するに至る位を十地と云ふ。此の如く十地は、菩薩の修行に依り、眞實無漏の功德の顯はれたる境地にして、凡夫が正しく佛子として、如來家に生れ出でたる位である。されば華嚴の十地品には十地は是れ菩薩の最上の妙道、最上の明淨法門なるゆゑ、三世の諸佛皆この十地を説き給ふことを明かし、龍樹菩薩の十住毘婆沙論や、天親菩薩の十地經論等に委釋あり。此等の説に依れば、十地の菩薩、自證化他の德を成就し、遂ひに眞實無上の佛果に到達すべきこと、たとへば、阿耨達池より四河流出し、四天下を灌沃し、後に大海に入るが如く、菩薩も亦是の如く、菩提心より善根大願の水を出し、四攝(布施、愛語、利行、同事)を以て、衆生を利益し、十地次第に順行し、遂ひに一切智々の佛果に趣向することを明す。此等の説は、十地は菩薩の最上位なるも、これなほ因位にして佛果にあらず、密教にてもかゝる一般佛教の説に準じ、四十二位または五十一位の階級を立つることとあり、かく四十二位或は五十一位の位階を建つるときは、一般佛教の所説と同じく、十地は菩薩の最上位なるも、これ佛果に至る道程にして、因位の境を出でないのである。

しかるに眞言密教には、かゝる四十二位、或は五十一位の説によらず、たゞ十地、または十一地を以て菩薩修行の位階を明すことあり。しかして今本經の意は十地を以て眞言行者の位階を示すものである。この義よりいへば、十地の前に種多の階級を立てざると共に、また十地以上に佛果の實在を見ず、因果の諸位凡て十地に該攝するのである。

但し本經の説相に依れば、十地の前に八心、三切、六無畏の階級あり、この三切、六無畏を經て、十地の最初の初地に入り、順次第二地乃至第十地を經、第十一地に於て究竟の佛果を成ぜらるべきことを明す。即ち



三切、六無畏を經て十地に歸入すべきが故に、眞言門修行者の位階は、十地　みにあらざるやと思惟せらるゝも、而も十地を以て眞言行者の位階をつくす說よりいへば、三切は所斷の惑と能斷の智と相對し、以て法性の眞際に趣入する相を明すものなれども、これ顯敎より密敎に入る所謂迂回の機根の修行入證の相を說かれたるものにして、直に眞言行者の入證の位階を示されたるものにあらずと見らるゝ義あり、また六無畏は正しく眞言行者の經べき位階なるも、而も一念に本覺の眞性に契合し、初地の佛果を體得する證境を暫らく別說し、之を小乘、三乘、一乘敎の淺深卽ち客觀、主觀、絕對と次第して法性に悟入する一般佛敎の說に準じ、以て六無畏の位階として示されたるものなりとも見られ、また一念に初地の佛果に契證すること容易ならざるより、初地の前に三切、六無畏を開き、以て漸次趣入の道を開示し、初地入證の次第を明かせしものなれば、三切、六無畏は初地に攝せらるべきが故に、究竟していへば、地前の諸位は初地の一位を出でないのである。かく十地の前に立つる諸位を、初地に攝し、一切の位階を十地にてつくすと共に、初地の一位に於て自證の成佛を究竟する秘義を明すものである。一般佛敎の初地二地乃至十地を經、以て無上大覺を成する說に對し、密敎は初地の一位に自證成佛を圓滿すと云ふは、これ所謂密敎は果上の法門なるゆゑである。例へば王は子生れながらにして王位を繼承すべき德あるが如く、毘盧遮那法身の大覺の體、一切處に遍在し、一切衆生は毘盧遮那大覺の體に連らなる佛子なるが故に、深くこの秘義を體得せば、當位卽絕對にして、地々遷登し第十一地に至らずとも、初地の一位に於て究竟成佛すべきである。されば本經には

信解地は無對なり無量なり不思議なり、十心を建立し、無邊の智生ず等

といひ本經の疏には

行者此れより待對あることなく、心量を出過せる不思議地なり、十心あり無邊の智生ずとは卽ち是れ初地の果相なり。云々

十地の最初たる初地の一位に自證成佛を圓滿せば、第二地以上の地位を設くる要なかるべきはずなるに、初地自證圓極を明す密敎に、第二地以上の地位を立つるにつき中古の學者の說に曰く、初地に自證圓滿するも、一般佛敎の說に準じて第二地以上を開立せしものである、或は云ふ初地の德を開いて第二地以上の次位となせしなり、または云ふべし二地以上は化他の德に約して開きしものなりと。要するに一般佛敎の說に依れば、十地の地々に各々一波羅蜜の德を成就し、地々遷登し、十地の間に十波羅蜜を具し、第十一地に至つて、究竟の佛果を圓成することを明すも、密敎は初地に自證成佛圓極するが故に、初地以上は、皆これ佛乘の功德を開きしものなれば、十地に高下淺深なし、されば秘藏記には、密敎に云ふ所は橫の義なり、初地と十地と高下なしといへり。

なほ前叙の如く淺略釋よりいへば、十地の外に佛果を立つるも、深秘の義に依れば十地の因位に佛果を攝し、十地の外に佛果の實在を說かず、しかる所以は佛果の體たる如來の大覺は一切に遍じ、萬法の外に佛果の別體なきゆゑである。卽ち佛果に法、報、應の三身あり、その報身應身は十信、十住、十行、十回向、十地の菩薩に應同するが故に、此等因分に同じ、果分の別體なく、またその法身の體は諸法に遍滿すれば、また果位の別相として求むべきなし、かくの如く如來の果體全く因位に同じ、因位の外に果體なき實義より見れば、因位各々の功德の當體皆これ如來の具德を表現せる差別智印である。この一々の智印萬德を具し一味平等である。しかして差別智印を十地の因位とし、一味平等の德を佛果の一位とす。淺略の釋に依れば、差別智印の外に一味の功德の體存するが如く說くが故に、因分外の

に果分を開立するも、若し深秘の實義よりいへば、差別の智體各々一味の覺體を具し、互に法界に遍じ、差別智體の外に一味の果體なし、本經に初地の位に如來の果體を體得すといひ、或は此生に十地を滿足すと云ふは、皆如上の秘義に依るものである。即ち一切衆生その自體を動せず、而も如來大覺の境に住す、この秘義を自覺せば、凡夫の身を捨てずして如來家に生じ、佛子たり菩薩たるべきである。眞にこの自覺に住せば、一切の動止施爲皆これ如來の功德を表現せるものである、これを十地の因位卽佛果位と云ふ。十地はかの九句の中、淨菩提心の功德の差別を明す心殊異の答說なりと云ふが、此等の教意より見て、十地の眞趣を思ふべきである。

十一、六無畏

本經には三劫、十地の次に六無畏の法門を說けり、前叙の如く三劫も六無畏も共に、一切衆生の煩惱の迷妄を破て、初地淨菩提心體に契合する道を明すものである。而して初地淨菩提心體に契合する道多き中、三劫の法門は、釋文より見れば顯教より密教に歸入する次第を說けるものにして、六無畏は最初より密教に歸し、曼荼羅の諸尊を本尊とし、三密加持の修行に依り、本尊と感應道交の境に入り、遂ひに本尊と自心との主客分別の細念を離れ、根本煩惱たる微細妄執を斷じ、初地淨菩提心たる自心佛の本性に契合する道を明すものである。卽ち三劫は無我の理觀に依て、自心佛を體得せんとする道を示すものにして、六無畏は如來と感應加持の秘觀に依り、自心佛を見んとする道を說かれたるものである。但しこは三劫、六無畏相望して一應その相異を述べしものである、もし三劫のみについていへば三劫の文相は所寄齊の顯教を說けるものなるも、その釋意趣は六無畏と同じく、眞言行者の菩提心の轉昇を明かすものなることは、三劫の章下に述べしが如し。本經の疏の六無畏の釋に曰く

金剛手既に此教の諸の菩薩は、直に眞言門に乘じて、菩薩地に上ると聞くを以ての故に、世尊此菩薩道を行する時には、幾種の無畏處を得ること有ると問ふ。佛、還て復た前の三劫に約して差降を作して對明し給ふ云々

卽ち上の三劫は表て顯教の義を說けるが、この顯教に對明して、眞言行者の菩提心の轉昇の相を明かされたるものは、六無畏である。卽ち六無畏は眞言行者、本尊を心外に見ることあるも、無相空なりと觀じて愛執せず、更に唯心觀に住して佛を念じ、つひに生佛自他の分別を離れ、無分別に住し、眞の絕對法身に契合する道を示されたるものである。而して本經の疏の六無畏の釋には、六無畏各々について、所謂所寄齊の顯教の義と能寄齊の密教と並べ明す。

第一善無畏とは、所寄齊の顯教よりいへば、一向惡行の人、善心を開發し、五戒十善を修するが故に、未來惡趣の苦を免かるべしと知り、心やゝ安穩を得る位なり、若し能寄齊の眞言行者よりいへば、始めて曼荼羅に入り、阿闍梨より本尊の三密門を授かり、本尊の三密を修する位なり。

第二身無畏とは、所寄齊よりいへば、此身は種多の因緣和合に依りて成ぜるものにして、不淨の惡露充滿すと觀じ、男女の相に對し、貪愛の念の薄らぎたる位なるが、眞言行者よりいへば三密行を修し、本尊の靈相を感ずる位なり。

第三無我無畏とは、聲聞の人、此身は五蘊の法體の和合に依つて成ぜるものなれば、人身に堅實の我體なき、人空の理を觀ずる位にして、眞言行者三密修行のとき種々の靈相を感見することあるとも、本尊の加被力と行者の信念の感應の因緣に依つて現ぜしものなることを知り、その自性無相なりと觀じ、愛執を生ぜざる位である。

第四法無畏とは、人空の理を觀ずるのみならず、觀智を以て五蘊の法體を分析し、五蘊の法體をも空なる理を一分悟

了するをいひ、眞言行者所感の本尊の境界は、鏡像水月の如く、自性空なりと觀ずる位なり。

第五法無我無畏とは、これ十住心にては、第六七二ケの住心にして、萬法唯識の理を觀ずるのみならず、唯識の自體も空なりと知る位にして、眞言行者本尊の境界は唯心所變なり、その心の自體も空なりと體達する境地である。

第六一切法平等無畏これ十住心の第八九十住心即ち第三切の法門なるが、萬法は眞如一心の所變にして、一心と萬法とは一如不二なり、また一心も無相不可得なりと觀じ、有爲無爲分別の念をも離れ、平等法界に住する位なり。眞言行者本尊法界身なるが故に、我身本尊のうちにあり、我また法界身なるが故に、本尊我身のうちにある不二の妙體を觀じ、本尊と自身との相對分別の念を離れ、自心これ法身金剛の體なり、如來大覺の體たる秘義を體得する位である。此の如く法界曼荼羅を觀成じ金剛寶藏開見の第六無畏の極致は、これ十地の最初の初地に契ひたるものである。

十二、十緣生句

本經には六無畏の次に十喩即ち十緣生句の觀を明かす。而して本經の疏には、六無畏は九句の中の心相の答說にして、十喩は修行の句の答說なりとせり。蓋し六無畏は、眞言行者の淨菩提心の轉昇の相を明すものなるが、その心相とは三切の章下に述べしが如く、三切、六無畏に所超所斷の妄心と、能超能斷の淨心とあり、しかして所斷の妄心の邊より見て、心相の答說なりと云ふ乎、もし能超の淨心についていはゞ、三切と同じく心續生の答說と見るべきである。次に十喩を九句の中の、修行の句の答說なりと云ふは、十喩はこれ三密修行の上の離著の法門なるが故に、修行の答說とす。即ち眞言密敎は、その修行門よりいへば、曼荼羅を造立し、諸尊の三密を修するを要とするものなるが

故に、主客分別の妄執を離れ、心地を淨除する十喩の觀門を最も旨要の法門となすのである。本經の疏に

下の文の萬行の方便の中の如きは、此十緣生句に藉(ヨソナ)て、心垢を淨除せざることなし、是の故に當さに知るべし、最も旨要と爲す。眞言行者特に宜しく意を留めて之を思ふべし。

眞言密敎の敎意よりいへば、この敎に依て修行するものは、自身はこの金剛薩埵なり、毘盧遮那の具體法身なる深き佛地の三昧に住すると共に、この佛位に直入し得る、如來果地の三密門を修するが故に、一念に佛位に證入すべきはずなるも、無始以來の分別妄執に依るが故に、我れこれ凡夫なりとの思ひを發し、決定して我即佛の諦信を成ずることを得ず、されば無碍大自在の佛境界の法門たる如來三密の行を修し、加持感應の力に依り、漸次に分別の妄執を消融し、次第に佛位に趣入する位階を六つに分かちて六無畏と云ふ。而して十喩とは、六無畏の行位中に用ふる心垢淨除の法門である。十喩とはまたは十緣生句ともいひ、一切法は皆これ因緣生にして、生ぜしものそれ自身に、固定の自性なきことを下の十法によせて示せし法門である。

幻、陽焰、夢、影、乾闥婆城、響、水月、浮泡、虛空花、旋火輪

即ち萬法の無自性なること、例へは幻術師が現ぜし種々の相貌の如く、また曠野の中に風塵を動かし、日光之に映じ、宛も野馬の如くまた水相の如く見ゆる所謂陽燄に等しく、夢の如く、鏡中の影の如く、或は空中に現ずる蜃氣樓即ち乾闥婆城の幻有實無の如く、或は聲に依つて生ずる響の如く、水中の月の如く、水上所現の泡沫の如く、眼膜の爲めに空中に種々の花を見るが如く、或は人の手に火燼を持し空中に旋轉し方圓三角等種々の相を作すが如く凡て萬有は業因緣所生なれば、その假有實無なることを以上の十喩によせて明かせしものである。隨つて十喩の觀は從緣生

無自性の義を明かすを表とするものである。而もこの無自性の義に淺深重々あり、また諸宗の觀行一準ならざるが故に、十喩にも種多の義あり、即ち小乘の人空、三乘の二空、無所得觀、或は天台の一念三千、華嚴の重々無盡觀等皆十喩の觀のうちに攝す。しかして密教にては、三密加持の修行に依り、感見する如來不思議の境は、有空の分別を絶せる、毘盧遮那具體なる理趣を體する觀門として用ゐるものである。此の如く十喩無自性觀に種多の義あるより、本經の疏にはこれを三劫の釋に準じ、即空幻、即心幻、即不思議幻の三種に分つて釋せり、即ち即空幻とは初劫の法門にして五蘊より成れる人體の無我なるのみならず、五蘊の自體も性空なりと悟了する所謂證寂然界の菩薩所證の境地にして即心幻とは第二劫の法門である。即ち初劫の證寂然界の菩薩は五蘊の性空を觀ずると云ふも之れなほ心外に五蘊の法を存し、この心外を觀じて性空なりと悟了するものなるも第二の即心幻にては萬法唯心所變なれば諸法の當體を破せず、寂然として一心の影像なりと觀ずるのみならず、その一心の自體も無相空なる事、幻の如く陽焔の如く夢の如く影等の如しと證悟するを云ふ。第三即不思議幻とは第三劫の法門にして、これ第八九十の住心の所明と一致するものである。即ち第二劫にて性空の體を心の實際なりとし、或は第八住心に眞如一心なる實體に執滯せる時、かゝる心の實際もまた無自性にして幻夢等の如く自性不可得なりと觀ずる處に、一切分別の細念消盡し無分別の眞智たる毘盧遮那の常心顯現す。而も今密教にて十喩の觀を明すは單にかゝる理觀を說くにあらず、前叙の如く眞言行者三密の行を修する時、感應加持の因緣に依て不思議の佛境界を感見する時、この不思議の靈感に執滯せず、その靈相の事實に即して、その事實を超越し、如來の眞身を體する道として、この十喩の法門を明すものである。本經の疏に此旨を釋し

行者瑜伽の中に於て、自心を以て感とし、佛心を以て應とし、感應の因緣、即時に毘盧遮那所意見の身を現じ、所

宜聞の法を說き給ふ如きは、然も我が心亦た畢竟淨なり、佛心亦た畢竟淨なり、若し我心に望めては自と爲し、佛心に即しては他と爲す、今此の境界は自より生ずとやせん、他より生ずるか、共より生ずるか、無因より生ずるか、中論に種々の門を以て之を觀ずるに生不可得なり、而も形聲宛然として即ち是法界なり、幻と論ずれば即ち幻なり、法界と論ずれば即ち法界なり、遍一切處と論ずれば即ち遍一切處なり、幻と論ずるが故に不思議幻と名く、

又曰く

觀心を以て因とし、三密を緣として、普門の海會現前して謬らざるが故に名けて有と爲し、種々の門を以て推求するに都て不可得なり、是を名けて空と爲し、此の有此の空皆法界を出でず故に說いて中と爲す、三諦は不同にして同なり、不異にして異なり、一切方便乘の人、思議すること能はず、云々

即ち第三即不思議幻とは眞言行者曼荼羅に入り、三密加持の行に依り、佛境界を感見するとき、即空即假即中の三諦圓融の觀に住し、感應の境はこれ有無の分別を絶せる毘盧遮那具體法身なることを體得する法門である。本經の疏に阿闍梨の言はく行者初めて觀行を修して境界現前する時、內因外緣の力に由るが故に、自然に緣起の智生ずることあり、常途の習定の功力苦ろに至て、而して後ちに通徹するに同ぜず。

此等の文はたゞ一心無相の理觀に依り、解脫を得んとする一般佛教は、如來の加持力を缺くが故に、習定久しきに亘り勤修せざるべからざれども、密教は如來の三密門を修し、加持感應の境に入るとき、自ら分別の念を離れ、無分別の眞智を發得し、本覺の眞心に契證し得らるべきを說くものである。即ち不信而信、心を本不生際に住し、己を空うして、如來を念ずるとき、自心の眞佛に契合せらるべきを明すものである。(完)

昭和九年九月十五日印刷
昭和九年九月十八日發行
日本宗教講座
第九回配本

東京市神田區一ツ橋通り二
發行所　株式會社　東方書院
振替口座東京一〇八
代表者　三井品史

東京市小石川区久堅町一〇八
印刷所　共同印刷株式會社
代表者　井上

印刷所　東京印刷株式會社

製本所　東京市神田區一ツ橋通り二
發行所　株式會社　東方書院
振替口座東京一〇八

製本許不

終